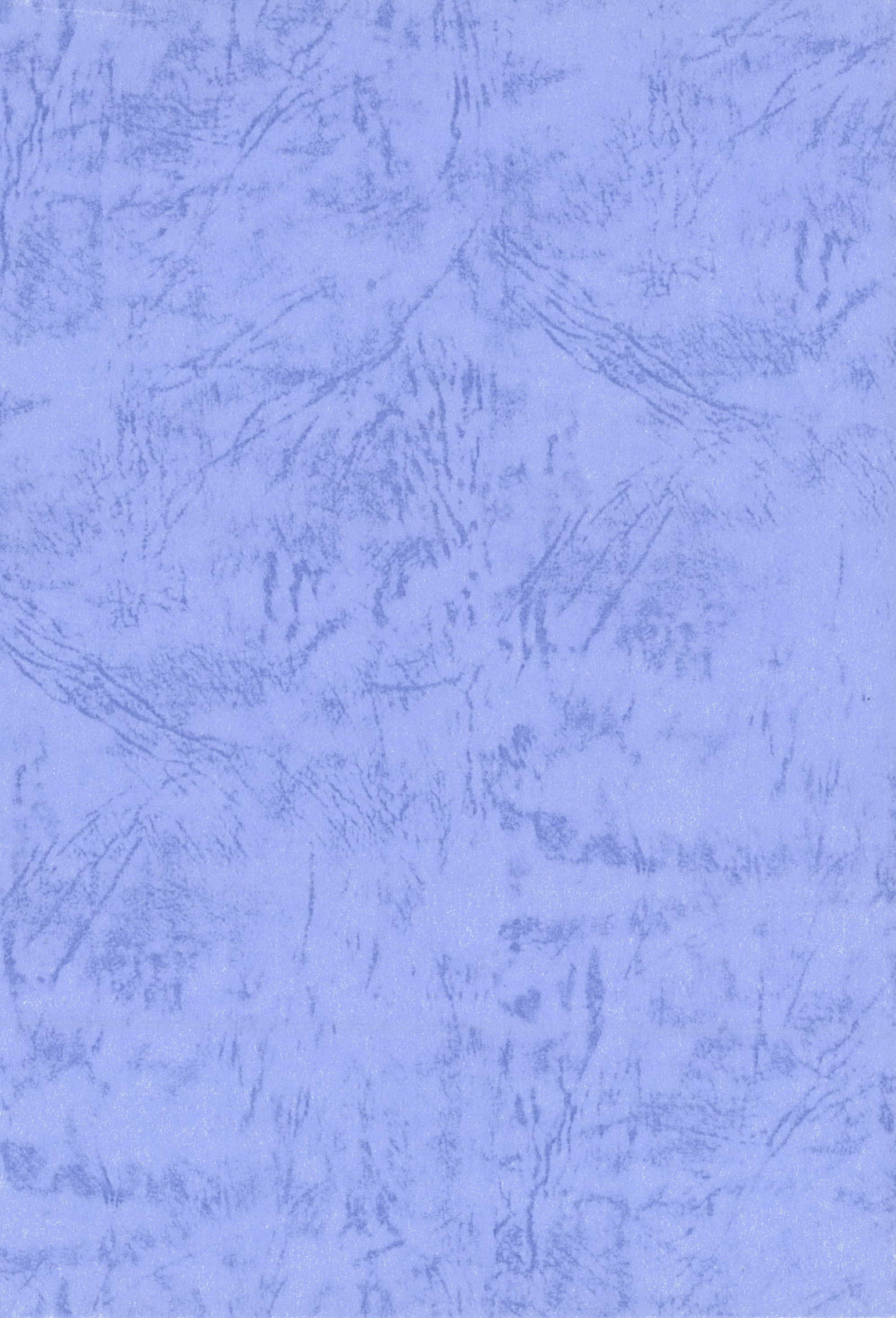


資料

田所廣泰先輩
遺文追録

社団法人
国民文化研究会
刊



はしがき（解題を兼ねて）

一、本集編纂作業の経緯

加納 祐五

田所廣泰先輩の遺稿については先に『憂国の光と影』として本会から公刊されてゐるが、ここに編集した二篇はその後新たに見出されたものであり、何れも本会会員足立原茂徳氏を通じて提供されたものである。田所さんは所謂「精研事件」によつて昭和十八年十月、学生運動の拠点であつた「日本学生協会」及び「精研科学研究所」の解散を命ぜられ、一切の思想、政治活動を厳禁されたのであつた。然し憂国の念なほやみ難き同氏には、同十八年年末の頃から東京高等師範学校の生徒との間に新たな思想交流が秘かに持たれるやうになつてゐた。当初十人程度の集りであつたが、その中心人物が足立原氏である。その思想交流、共同研究のため、田所さんの御自宅その他適宜の場所において度々会合が重ねられたが、ここに収められた第一篇「講義要録」はそのときの講義内容を記録したものである。その時期は、戦況苛烈を極めた昭和十九年六月から同年八月にわたる間、十二回に及んでゐる。その後、田所さんは前年の拘置（昭和十八年二月より六月に至る）に引続き再度の憲兵隊による拘置（昭和十九年十月より十一月に至る）の厄にあつて、健康も害されたため会合は以後中断されたものと思はれる。

この「講義要録」はすべて東京高等師範学校の生徒の一人であつた高橋正純氏（故人）の執筆になる原稿によつて提供されてゐる。田所さんはその講義に當つて予めその要旨を自ら書いて聴講者に配られたと聞いてゐるが、ここに収録されたものが、その自筆原稿によるものか、或いは聴講者がその要旨を筆記したものであるかは必ずしも判然とはしないところがある。恐らく両者混淆してをり、行文のあり方から判断するかぎり後者が多いものと思はれる。

第二篇「同信交流の記録」は、同じく高等師範の同志の一人であつた木野嘉明氏に宛てられた田所さんの

書簡であつて、その時期は交流の始つた昭和十八年の十一月から同二十一年三月迄の間の六通が収められてをり、その各通には夫々にその時々の木野氏周辺の生活事情、社会状況と併せて書翰の内容についての同氏の感懐、追憶が付記されてゐる。この書簡の収録については次のやうな経緯があつた。最初に足立原さんから「講義要録」の提示を受けてこれを披見された小田村理事長（当時）は、その中に今日の我々にとつても更めて気付かされるところも多々あり、もしこれに当時の戦況の推移や国内の政治状況の解説を付記できれば田所廣泰追悼文集として会で印刷化出来るのではないかと考へられて、その作業を当時関係された学生のうちで今協力できる方どなたかにお願ひできないかと足立原氏に依頼したところ、同氏はこの作業を木野氏に委嘱されたのであつた。ところが木野氏には、小田村理事長の意向に沿つた解説文を執筆する前に、御自身の手許に残されてゐた田所さんからの書簡を整理して、それに木野氏御自身の感懐を付記、本書第二篇に該当する書簡集を編集されたのである。これはまた当時の同信交友の有り様の一端を窺ひ知るに足る貴重な文献となつてゐるが、残念なことにそれが出来たのは既に小田村さん亡き後のことであつた。

ここに第一篇の田所さんの「講義要録」及び第二篇の「同信交流の記録」を一冊とするに當つて、かねて小田村さんが気にかけてをられた、この田所さんの遺文をめぐる当時の国内外の情勢については小生が若干の解説を付して御参考に供することとした。

思へば田所さんには遺稿集『憂国の光と影』があるが、昭和十八年以降は殆んど収録された文章はなかつたその空白を埋める貴重な資料として本書が果す役割は大きく、田所さんは言ふまでもなく、小田村さんの御霊もまたその刊行をさぞかし喜んでくださることであらう。

二、当時の戦況その他について

田所さん自身の当時の動静を略述すれば、

昭和十八年十月、学生協会、精神科学研究所の解散に伴ふ当面の事務処理を終る。

同年十一月頃より高等師範学校生徒との交流始る。

昭和十九年四月、福島県人森愛子氏と結婚

同年六月より八月の間、本集に収録せる講議を行ふ

同年八月夫人実家のある会津若松に疎開

同年十月三十日より十一月十六日迄、憲兵隊による第二回目の拘置、為に宿病再発し悪化する。

昭和二十年三月、長男宏之氏会津若松市にて出生。

同年七月、岩手県盛町に再疎開。療養に専念中終戦を迎へる。

昭和二十一年六月、病勢回復することなく日本の将来を深憂しつつ盛町において逝去。

ここに収録された諸講義は前記の通り、昭和十九年六月から同年八月一日までの約二ヵ月余、やがて二度目の憲兵隊拘置に至るまでの期間に集中してをり、東京在住の時期のものである。書簡の方は、交流の始つた昭和十八年十一月から翌年四月迄の間に四通、そのあと第五信は再度拘置からの釈放直後に会津若松から、第六信は亡くなる三ヵ月前に再疎開先の盛町からのものとなつてゐる。

この時期に前後する戦局の推移を見ると、昭和十七年後半から十八年の前半にかけて太平洋戦域においてわが軍は逐次後退を余儀なくされ、十八年二月にはガダルカナルを撤退、欧州独ソ戦線においてはスターリングラードその他の各所において独軍の後退が始まり、四月には山本司令長官の戦死、五月にアッツ島の玉砕、九月にはイタリーの全面降伏と続いた。この様な状況を受けて十八年九月末、大本営は戦勢転換のため思ひ切つて戦線を縮小し、絶対に確保すべき領域を定めて不敗の態勢を確立するといふ「絶対国防圏戦略」を決定したが、時期は既に遅きに失してゐた。敵軍の侵攻は極めて速く、同年十一月にはギルバート諸島のマキン、タラワ、翌十九年二月にはマーシャル群島のクエゼリン、ルオットの両島も敵手に落ち、続いてカロリン群島に襲撃、四月までにはトラツク、パラオの諸島も失つた。斯くして六月十九日にはマリアナ諸島のサイパンに敵上陸、その間、欧州戦線においては六月六日米英軍はノルマンディに上陸、ドイツの顔勢は愈々顕著なものとなつてゐた。月余にわたる死闘も空しく七月七日、サイパン島守備軍は玉砕し、絶対国防

圍戰略はその最重要拠点の失陥により早くも破綻して日本本土は敵の制空制海権の中に曝されることとなった。政府は七月十八日に至つて漸くサイパン島陥落を公表すると同時に東條内閣は総辞職し小磯内閣が発足することになった。小磯内閣はこの戦局を受けて、戦線を更に縮小後退せしめ、最終防衛線とも目すべきフィリッピンに予想する一大決戦に戦勢の転機を求めんとする戰略に転換せざるを得なかつたが、後手々々にまはり、これまた遅きにすぎた戰略の転換は、この戰略のための態勢を整へる余裕もなく、米軍は速くも十月にはレイテ島、翌二十年一月にはルソン島に上陸し、やがて二月には硫黄島、四月には沖繩への上陸を許すことになるのである。

三、本集内容に関する若干のコメント

ここは、収録されたものの内容について私見を述べる場所ではないが、読者の中には戦後に生まれた方も多いと思はれるので、これを読み進まれる上に何等かの参考にならうかと思はれるところを若干記しておきたい。

これらの講義は全戦局が愈々危殆に瀕する転機となつたサイパン戦の前後に集中して行はれてゐる。その緊迫感戦後五十余年をとにかくも平和裡に過ぎてきた我々の想像を絶するものがあらう。それ故この一連の講義は、その思ふところを予め整序して周到に説かれたものではなく、逼迫した時局の推移に促迫された時々の所懐信念を打ちつけに語られたものであらう。このときに當つての講者の痛酷の真情は、最終講「マタイ伝私講」において、民族興亡の岐路に立つたキリストの言動に託してよく語られてゐるが、平静にのみ事を語り得る時機は既に遠く過ぎてゐたのである。

最初の講義はサイパン島に敵上陸のときに行はれてゐるが、この戦局の重大推移を最大の危機として動転狼狽する者の多い中であつて、田所さんの見るところは些か違つてゐた。たとへ目前の戦闘に敗北することはあつたとしてもそれは決して最大の危機なのではない、大事は更に一層苛烈にして而も永続的な戦ひを続

けねばならぬことであつて、その用意をすることこそ我らのつとめであるとした。この初講の後旬日余にして愈々同島玉砕の報に接したときには、恐らく年内にも米軍本土上陸のことあるべしと覚悟した上で、そのときこそが亡国ともいふべき最大危機であるとして、若しこの事態を不敗に導くべき方途ありとすればそれは思想改革を実現し、それに基く政治の变革、国民指導方策の是正を図るより外に唯一の道もないとの確信をいよいよ深くした。予ねて支那事变の長期化するに當つて、戦争は須く短期戦たるべしと主張して早期解決の方途を講ずべしと身を以て警告したのは、斯くてはやがて亡国の日の到来すべきを深憂してのことであつたが、事、志と違ひ事態かくなる上は、国民は最後の一人まで戦ひ抜く覚悟を固めよと主張するに至つた。この間を一つに貫く田所さんの志は奈辺にあつたのだらうか。

顧ると田所さんの思想の営為活動は昭和の初期に始まつてゐるが、第一次世界大戦の余殃は当時既に各所にその相貌をあらはにし第二次動乱の予兆は我国周辺にもひしひしと迫りつつあつた。「文明の衝突」といふ言葉は近時ハンチントン氏の著書によりよく人の口にのぼるやうになつたが、およそ歴史を顧みるなら時代によつてその形は異なるにせよ、凡その国際交渉、紛争が文明の戦ひでなかつたことはあるまい。それ故、やがて日本が直面せねばならぬ必至の事態に対する用意としての田所さんの思想活動が日本の歴史、文化の探求、ひいては日本国体の闡明に向つたのは当然のことであつた。昭和十六年執筆の「戦争論の改訂を要求す」には既に次のやうに書かれてゐた。「世界戦争の動乱において人類はいまその信を問はれつつあるのである。(中略) 各国民族はその歴史的な生活に於て生成し來つた民族生活の諸価値を、世界史の上に客証すべく迫られて居るのである。(中略) 歴史を無視するものは動乱の渦中に沈没するより外はない」と。田所さんの大東亞戦争観はここに尽されてゐるやうに思はれる。察するに、この戦いは文明の衝突と言はんよりは寧ろ邂逅であり、更には融合であつた。日本国民がたどつてきた歴史の跡、その上に形成し來つた日本文化の特質、諸価値については各講義の中に深切な体験も含めて多角的に論じられてゐる。凝縮された論講の内容は必ずしも読み易いものではないかも知れないが、読者諸氏夫々に深くその意の存するところを読みとつていただきたい。敢てここに私見を述べるなら、田所さんが戦勢の帰趨如何に拘らず、一貫して最後の悲願とされたこと

ろは国体の闡明にあつたと言へるのではなからうか。だがそれは容易の業ではなく、非力の致すところ我々の運動もまた挫折と失敗の苦汁を喫するの外なかつた。大東亜戦争は不幸にして敗戦の形において終結せざる得なかつたが、この終戦による世界平和の回復は、一つに昭和天皇の「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ」といふ国体護持の固い御確信―それはまた「忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ」といふ国民に対する深い御信頼でもあつた―によつて成つたのである。何人も予想すら出来なかつたやうな平穩の裡に終戦のことが運ばれたことは、世界の識者のひとしく奇蹟として賛嘆措く能はざるところであつたが、一方、日本国民にとつてこのことは、例へそれを自覚すると否とに拘らず、遍ねく広大無辺の大御稜威の恩沢に浴せしめられたことでもあつた。さて、戦後半世紀を過ぎた今日の日本の現状を如何に見るべきだらうか。このことはまた、日本国民はいまよく天皇の御信倚にお応へすることが出来てゐるのであらうかといふ形で問ふてもよい。こゝは是非とも田所さんを地下から喚びおこしてその所見を伺ひたいところである。国体の護持、闡明といふことは、ここにあらためて断るまでもなくただ「随神の道」「君臣一体」といふ様な表象、概念の措定に止まることではなく、肝心はそれを如何に生きるかといふ意志であり、平生の心掛けであり、それ故にまた念々と不断に相続せらるべきものであつた。田所さんが戦中、戦後を問はぬ「永続的な戦ひ」と言つたのはそのことであつたと思はれる。時代の苦悩を共にし、これが打開のための戦ひに呼び交はしつゝ、心を通はせて協力するものを「同信の友」と呼んだ。時代は様相を一変し歴史は不斷に開展する。学術研究の分野においても、また實際活動の方途においても、徒に旧套に泥むことなく、時代に相応はしい展開を図るべきは言ふまでもないが、同信の友としてその道統を継ぐものとしては、先づ先人の志の迹を憶念しこれを心底にたたむことを忘れてはなるまい。本集を編んだ所以も偏にそこにあつたことを諒とせられたい。

終りに、足立原、高橋（故人）、木野諸氏をはじめ本集の編纂刊行に御協力下さつた多くの方々に篤く御礼を申し上げる次第である。

平成十四年三月

田所廣泰先輩 遺文追録 目次

	はしがき（解題を兼ねて）	加納祐五	1
	第一篇 講義要録	高橋正純（記録）	9
第一講	経済学博士岸本氏に対する批判		9
	昭和十九年六月二十四日 記		
第二講	リットルトンの問題より戦争の本質を論ず		13
	昭和十九年六月 記日不明		
第三講	ヴァンルーンの「聖書物語」の一節について		17
	昭和十九年六月 記日不明		
第四講	当今の所謂日本主義について		24
	昭和十九年六月 記日不明		
第五講	外国文化摂取の態度について		27
	学生諸君のなすべきこと		29
	昭和十九年六月 記日不明		
第六講	道元禅師の「正法眼藏随問記」について		30
	昭和十九年六月 記日不明		
第七講	サイパン島玉碎		37
	昭和十九年七月九日 記		
第八講	三度「學術維新」を読む友等に		40
	世界観と哲学		42
	昭和十九年七月十六日		

第九講 日本に西洋のような哲学がなかったということ……………47

昭和十九年七月 記日不明

第十講 学生運動を如何に展開すべきか……………52

昭和十九年七月十七日 記

第十一講 新しき指導者……………58

昭和十九年七月?

第十二講 マタイ伝私講……………59

昭和十九年八月一日

第二篇 同信交流の記録……………木野嘉明(編)……………65

序……………65

第一信 昭和十八年十一月二十八日……………66

第二信 昭和十八年十二月十五日……………68

第三信 昭和十九年二月四日……………72

第四信 昭和十九年四月一日……………74

第五信 昭和十九年十一月二十九日……………77

第六信 昭和二十一年三月十五日……………80

○「遺文追録」はすべて高橋正純、木野嘉明両氏の手書き原稿によるものである。原稿はすべて新
仮名遣によつてゐるので、古典からの直接引用文及び和歌以外は田所氏書簡も含めてすべて新仮
名遣によつた。

○文中、「不明」と記載されてゐるところもあり、また文意必ずしも明らかでない個所もあるがすべ
て原稿通りとして、編者の判断による補訂は行はなかつた。

第一篇 講義要録

高橋 正 純 (記録)

第一講 經濟學博士岸本氏に対する批判

昨日木野兄が来られてのお話には、岸本氏(經濟學博士)が次のような話をされたこと、また、それを聞いた先生達は只茫然として言うすべを知らなかったこと、学生達は「自分等等特殊潜行艇に乗せてくれればいい」とか「第一線にやってくれ」とか言うばかりで、少しも問題を本質的に考えようとしなかったこと、などを聞かせていただきました。岸本氏の話というのは次のようなものです。

「敵はいよいよサンパンに上陸した。我が方よりこれを逆襲する余力は既がない。敵はフィリッピンを通過して支那大陸に行くか、それとも日本本土に直接上陸を敢行するかは何れか二途よりない。何れにしても近々天下分け目の大決戦が行なわれるであろう。もう、日本は人事を尽くしてやるだけのことをした。今は、日本はこの大海戦を待つて米國と雌雄を決するより他に方途はない。しかし、この大海戦が如何なる結果になるか予想することは出来ない。ただ神風を待つばかりだ。かような重大時期に諸君が勤勞奉仕をするのは当然で、既に遲きに過ぎるの感がある。我々にも動員が来るだろう。工場の帳簿つけなどをやらねばならぬかも知れない。喜んでそれに服するつもりだ。……」

木野兄が言われるには、他の先生達は國家のことを傍觀的に話すに過ぎないのに対して岸本氏は常に眞剣な口調で國家のことを談ずるのが学生に訴える所大ならしめている。また、その研究も實際的で、航空機のこととはよく分からなかったが、輸送上の問題で必ず困難が来ることを予想し、大東亞戦争前また後にしければ進言したが、航空機と輸送力の問題で戦争は遂にこの危機に迫り込まれてしまった、と言っておられる。しかしながら、その學問に対する見解は要するに分化であつて、自分は倫理とか哲學とかを論ずる場合は必ず門外漢であるが、と断ずることにはしていると云つておられること等、岸本氏に関して聞くことが出来ました。

この最近の同氏の話というのは非常に尤もらしくまた真剣な態度に見えて人を迷わせるものでありますから、私はこれに対して小見を述べたいと思います。

一、最大危局と言うものを我々はかくのごとく安易に描くことが出来るか？

最大危機は言う迄もなく国家滅亡の時である。もし日本が連合艦隊の敗北ということによって米国に屈伏し米国も亦これを容れて平和がここに成立すると言う考え方（それは余りに安易なる屈辱的なる考え方である）をとるならば、確かにサイパンより侵寇する米艦隊との大海戦は最大の危機である。しかしながら、たとえそれに万一敗北したとしてもさらに一層苛烈な、而して一層永続的な困難な戦いを続行せねばならぬのならば（そうしてそれを考えることのみが真摯な考え方だ）ここで容易に最大危機を云々することは出来ない。我々が最大の危機を用意するということは最も本質的なる用意をするということであり、如何なることがあつてもそれを最大危機と思わぬことであり、如何なる場合にも常に最悪の事態、考え得る限りの事態の用意を不断にして行くことで、従つて少しも驚かぬことでなければならぬ。岸本氏は第一慌てておる。平生考えるところが誤つたからであり、考えが誤つたというのには経済学的にのみ人生を考えて来たということの意味しておる。この危機観は経済学的というよりも物質的危機観である。しかしながら、人生の主導力は物質力ではない。故に、言うまでもなく岸本氏の危機説は間違つてゐる。

元来、人生で究極のものとか絶対的のものとかいうものは存在せぬ。それは不断にあるものこそ究極の意義あるものである。哲学とはかかる究極絶対無限というやうなことを考えることであるが、そのようなものが存在せぬということを悟るのが哲学を學ぶことの意義であり、又それを明らかにするのが哲学の使命である。それを明らかにするために無限とか純対とか究極とか言う言葉を使用するのである。何となれば、思想とは生命の源発的機能であるからである。常にひっくりかえしひっくりかえして思うことが思想であるからである。最大危機などと言うものがこの世に實在することく考えるのは善男善女の経済学者の迷信であつて、斯様な迷信に打ち克つことが人生に勝つこと、従つて戦争に勝つことである。それ故に経済學のみを學ぶと

いうことは一種の人生問題に対する思考停止である。これが日本の今日の危機を招来した有力の原因、否、最大の原因であった。

官僚も軍人も物質だけを考えた。企画院という数字を策定する役所が政治の中心になって、軍人も官僚も卒業後の年「数」によって任務が決定される生活に制約せられた唯物論者である。だからこの弊を打ち破らねば戦争は勝てないのである。物質主義者が人生のことを考える態度は岸本氏の如く嚴肅なる滑稽である。彼は学問とは如何なるものであるかを少しも知らぬのである。最大危機の先は何もないのである。その最大の危機はもう眼前に来てゐる。それ故もう未来はないのである。

二、サイパン上陸に対するこの悲觀論は末次大将の談話によって完全に批判されている

大部隊を擁して敵の本塁近くで決戦しようとするものは、サラミス海戦、アルマダ艦隊、日本海戦、元寇等、殆ど惨敗の歴史的事実を見よと言ひ、サイパン上陸部隊を見殺しに出来ぬ敵の勝利を急ぐ作戦を捕捉殲滅せよと言う大将の言葉には確信がある。高橋三吉大将や安保大将などよりはるかに具体的であり、信念的である。流石である。

三、神風論は物質主義的だ

神風が吹いて来るものとする素朴さは愛すべきだが何か天変地異があつて敵がまいるという考え方は唯物主義的神風觀である。元寇は北条氏の怠慢を語る以外の何ものでもない。神風は結果的なる考えであり、それが神国の信仰を助長したことは確かだが、神風が吹くから神国だとなれば逆である。予期せざるに吹くのが神風である。人事を尽くしつつあるから予期、予測する余裕がないのである。人事を尽くしたからして神風を待つというのは投機にすぎない、それは神を試みるものである、神の護りを信ずる者の態度ではない。

ところが、学生が職工として學業を放擲して働くということと人事を尽くすことに必然的關係を考へることとは誰にも容易に出来ない。またもし人事を尽くすことが終わったから学生は職工になるのだというならば

一層意味が分からぬのである。

四、神風を待つことと勤労働員との関係如何

以上のようにこの両者には必然的關係がない。学生は減じてもよからう。しかし最悪のなおその後に来るを予想せねばならぬ、最悪の事態に備える為に教育せねばならぬのだ。殊に岸本氏のような危機観がこういう時は恐ろしき結果を生むものであることを思うならば、もつとはるかに強い民族的粘りを養う為にも学生の眞の教育が必要である。それは、従来のように多くの時間を授業に要するというのではない。しかし相當の研究の時間を必要とすることは確かだ。この学生は無論誤れる考えを持つてゐる人、また考えの定まらぬ人に対する教師たるべき者である。技術的方面の科学者を養う上にも学生を労働者のように扱ふべきではない。岸本氏の説は学生に対する激励に至つてトンチンカンを露呈した。志ある学生はかような先生の思想と戦わねばならぬ。それが大東亞戦争である。

五、結論

そこでさらに、先に述べた危機に対する用意を整えること、現在の敗勢を盛り返すこと、この二つをどうしてもせねばならぬ。両者は二にして一だ。

- 1、戦線の極度の縮小
- 2、量より質への転換
- 3、誤謬思想の打破
- 4、国内の整備、協力の恢復
- 5、そこに徐徐にはあつても自然に充実する国力の上昇度が米国のそれよりも比率的に多くなればそこに勝利への第一歩が開かれる。

総合的にこの努力をすることが人事を尽くすことである。これなくして人事を尽くすの語を用いることをやめよ。国防国家より教育国家への転換である。それは詰込教育より青年の共感世界開展への教育への転換である。その時こそは今ここに來ておるのだ。

(昭和十九年六月二十四日記)

第二講 リットルトンの問題より戦争の本質を論ず

今日の「毎日新聞」を見ておると、チャーチルがメキシコ大使館で講演して「欧州での自由の発現はこの夏中に得られるかも知れない。…」と言ひ、且つそれを新聞に掲載すること許可したといい、また植民相リットルトンが「米國が戦争に捲き込まれた等と言うのは全く当たらない。米國が余りやりすぎたから日本が真珠湾をやらねばならなくなった。戦争挑発者は米國である。」という演説をしたといい、これ等が米國の新聞界で非難轟々であるというのである。また後の方に対しては國務長官ハルが「それは米國の真意を理解していない。」と言っているに止まり、抗議などしておらず、却つて弁解めいた口調で話しておるのも注目される。日本がサイパンを半分とられ米國では自分の方からの真珠湾攻撃だと言つて大騒ぎをしているとき、英國からこの冷水三斗を浴びせかけられたわけだが、英國は軍需品の大半を米國に仰いでおりながらこのような言明をするということは実に人を喰つた話で、英國は只者でない証拠である。日本も一緒に馬鹿にされたのだから、新聞などが単に米英間の争いというように報道しておるのは國民を迷わせるものである。しかし、英國が米國よりどんなに武器等を供給してもらつても支配的なる地位におることはその歴史から言い得る。米國人がそう言っている。米國の英國崇拜はどうしても取り去ることの出来ない伝統である。しかしそれはかりではない。米國は英國植民相の言う如く大義明分の立たざる戦争をしておるのだ。

一昨日の学生会館の会合で、米國が大義明分の立たない戦争をしているということが今後どのような結果を生むかが問題である、これはよく考えねばならぬ問題だと言つたが、昨日宮脇昌三君が滿州から歸つてき

て小田村君の家にいるのをこちらより訪ねたとき、同君が陸軍の何とか中將が「今日英国は存在しない、米国の属国となっている」と言ったというので、「軍人のかかる謬見は困ったものだ。武器を仰いでいるから戦略等も米国が主動的地位に立つとするのだから、戦争は戦闘ではない。戦争の主導者は英国が主、米国が従だ。」と言ったことであつた。すると果然、今日のニュースがあつたので興味を覚えたのである。日本が今どうしても徹底的に戦わねばならぬのは米国だ。英国はその後のとっておきの好敵手だ。

日本は元来ドイツとともにソ連を討たねばならなかつたのである。ソ連は欧米文化の末派で成金になつた奴である。同様の意味で米国はやはり欧州の末派だ。しかも凶に乗って来た奴だ。これを先ず打ち懲らすのが順序だ。

一体今度の戦争には重大なる根本関係がある。先ず、ドイツが前大戦で叩きつけられ、それから起ち上がった国家的復興力の原理はゲルマン神話の復活ということであつた。また直接的には共產主義撲滅ということであつた。それはフランスがラテン文化最後期におり、マルキシズムが政界の半分を占めておるのと比べて確かに威力があつた。そこで今日の世界の状態は、どうしても一国が強国として存在して行く上には五、六百万の軍隊と数十万屯の海軍と数千機の常備航空機とをその兵備として持つておらねばならず、それを支える経済的根柢がなければならぬ。そうすると、中、西欧に独仏両国が併存しておることは許されぬのである。ここに独仏は先ず戦わねばならなかつたが、それは無論ドイツの完全な勝利に終わった。しかしそうするとどうしてもドイツはソ連と戦わねばならなかつたのは自然である。また欧州統一の責任者を以て自ら任ずる英国と戦わねばならぬことも当然である。英国が独軍のポーランド侵入を契機として対独宣戦をしたのはかかる責任者としての自覚を示すものである。しかし、もしここに欧州戦争が英、独、ソ三国間のことであつたならば事態は必ずしも早く片付いていたはずである。何となれば、英国の欲するのは独が非常に強大にならざることで、独ソ両国が適當の戦争をした上で、英国は戦争の結末をつけることに努力しておつたかも知れない。しかしながら、ソ連が見込んでいたことは英国の戦争準備の不足とそれを補足する米国の力の發揚である。米国は英国の背後に隠れて間接に欧州の支配を志した。英国は戦争を終結する方途を失

つたのである。長期戦は必然の結果であった。何となれば、米国は戦争を自己の責任において処理する意志を持たねばならぬ地位にはないからである。その意味においてソ連も同様である。欧州戦争は当然英独間においてその結末をつけねばならぬものであるが、この欧州の分派、末派としてのソ連及び米国、殊に後者が戦争の主動的（物質的方面において）役割を占めることとなったことは欧州文明の惨事である。米国に欧州問題を解決する力のあり得るわけではない。しかも戦争は欧州における戦争である。英国は米国のこの発言力を封ぜぬ限り戦争を解決することは出来ない。それは英国政治家のよく知っていると看做されるからして今回のごとき米国を無視した発言となつたのである。また、英国が自分の意志でもって米国の助力を待たざる決定をしたならば米国は如何ともすることが出来ぬであろう。その方途は独英の間において真に欧州文化の問題を議することであるが、それが今日行ない得るかどうかは断言的に推定し得べからざることである。しかし、両国の首脳者は繰り返して言うようにその意志は必ず持つておらう。そうして結局において、米はこの英の意志に従わねばならぬことになる。米の世界制覇の意志は物質的には欧州及び東洋に及ぶべくもなく、精神的にはかかる意志を支持する伝統を欠いている。

要約して言うと、今次の大戦は欧州及び東洋における戦争である。欧州の戦争は英独間の戦争でありこれにソ及び米が参加している。ソ及び米は英独間の戦争によつて一稼ぎをしようというのであつて、欧州の戦争に大きな影響を及ぼすものであるが、最終的に決定力となり得るものでは無論ない。英独両者は英が植民地帝国として欧州の問題に集中出来ない欠陥があり、独が思想的改革の結果によつて欧州統一に終局することに関する信念を欠いてソ連との妥協により英と戦わんとした信念の欠落がある。この両者は米及びソを戦争に誘導した原因であり、結局欧州の統一を永く期しがたき所以である。たとえ戦争がかりに終わつても、それは再び、三度欧州の動乱を激化せずにはおかぬであろう。今日、英が独との提携によつてのみ欧州問題を解決し得ることを真に理解し、その決意をなし得たならば、英国はその世界帝国の地位を長く保持することが出来ようが、それが望めぬ所に英国の、また欧州の文化的問題がある。欧州諸国民がルネッサンスより現われた復古の原理を欠いておることは救い難き欠陥として、ここに戦争の将来を決定する終局の原因と

なっている。要するにそれは思想問題である。

東洋における戦争を英が回避しようとしたのは、英が米よりもはるかに欧州の戦争を重大視しておいた理由である。それは英の責任ある態度であった。この態度は欧州戦争との関連において考慮すべき重要な問題である。しかしながら、大東亜戦争においては米の対日圧迫が原因であったが、それを誘発したのは日本の支那事変における不真面目な戦争であった。神意満州事変を歪曲したものの延長であったことを思うならば、今の日本の窮境は受くべき当然の結果である。それは日本が自らを欺きしことに対する神譴である。この因果関係を自覚したならば日本は真に勇気を取り戻すべきである。何となれば、神譴を自覚することは神寵を認識することであるからである。神意は満州事変にあつた。日本は満州事変に帰って自らの任務を考慮すべきである。そうして、この信念に基づいて米国と戦うべきである。日本が大陸にその根柢を持たぬ限り自立する能わざる事実に出発して、それを死守することを土台として米国と戦うべきである。食料その他の物資を南方に求めることを中止して、戦線も亦自衛圏を収縮して内線作戦の戦いをせねばならぬ。それは物を獲得する戦争ではなくして生命を防護する戦争である。大東亜戦争はそこに帰着せんとしつつある。それは詔勅渙発による戦争に加被せられたる神意である。支那事変の失敗は神寵である。日本が米国と徹底的に戦ったならば、即ち内線作戦により生命防護の戦いを遂行したならば、米国はこれを打破することは不可能である。米国及びソ連がどのような内部的欠陥を示すかがこの時問題となる。英国の自覚が戦争の調停的役割を果たすこととなる。

高等師範学校学生諸君に送った手紙の中にも、米国の国内崩壊がどういう形で現われるかが問題である、と言った。歴史の最も大きな観点から見ると、大義名分の立たざる戦争をした国の末路は常に崩壊に結果する。それは勝利を得る場合に著しい。米国は結局その運命を辿ることとなる。それが、長期戦の今日、どう戦争中に現われるかが問題である。それが日本としては重大な関心事である。

それは米国としては、東洋の問題よりも欧州の事態の方が重大関心事である。武器貸与もはるかに欧州の方が多し、要するに米国は欧州の分派であるからである。欧州の戦争が長びき、英国の自覚が生じ、日本

が内線作戦において米國に徹底的打撃を続けるならば、米國は戦争遂行の意義を失うに至るであらう。ここにソ連を援助することが如何なる結果になるかは次第にその兆候とともに米國人に明瞭になってくるであらう。神武天皇のご東征以後は日本の意義ある戦争は常に強大国との戦いであり、それは敵國の自然的解体に終わった。元寇、日清、日露すべてこれ然りである。日本が相手を徹底的に武力をもって崩壊せしめた試しはない。今次の戦争もその形をとることとなる。その時日本の自覚が高まることとなる。故に、今日の日本でなさねばならぬことは物量の対米抗戦ではない、質と価値とを重視するように轉換せねばならぬ。百台の飛行機が出来ても前線で役に立つのは十機にすぎないというのは質を軽んじたためである。大東亞戦争開始時の拡大せる戦線と領地の急激なる拡大、それによって誘發される物質主義的意欲が大正以来のデモクラシー、マルキシズムと結合した結果が今日の惨敗である。質が悪いのであれば、それは思想教育の問題であり、国内問題であり、また戦争より政治の問題である。今なお轉換の余地がある。つまり戦争の前途に対して希望があり、またそれは、単に戦時のみのことではなく戦後をも考慮しての一貫せる施策の必要とその余地とを示唆するものがある。その解決点は大正以来のマルキシズム、デモクラシーとの死闘に外ならない。ここに我が同志のなすべき務めがある。而して戦争の前途はこの一途より外に解決の道はない。我が同志が事をなす、なさざるにかかわらず。

(昭和十九年六月、記日不明)

第三講 ヴァンルーンの「聖書物語」の一節について

嫉妬心の強いユダヤの民族神が普遍的な神格に高められたということ、これは著者の叙述によると神の属性に変化が来たように見え、それは始めからユダヤの神はかくかくの神というふうには外国人もユダヤ人も見て

きたかに考えている如く見られるが、それは当たらぬので、ユダヤ人はエホバの神というものを祖先の神、自分の民族を護る親神と仰いでいたのである。従つて、ユダヤ人自身がユダヤの神をかくかくの能力、かくかくの性格を持った神と規定していたのではなく、そのようにどう規定するということではなくして、これを礼拝し、その加護を祈るといふのがその信仰であつたこと言うまでもない。しかし、ユダヤ民族が非常に悲惨な歴史を体験してきたこと、しかも一民族として何とかして戦いぬいて行こうという念願が熾烈であつた為、また現実的活動の部面において国家生活を護るといふ努力が欠け、その能力が足りなかつた為、ユダヤ民族はいたずらに他民族に対する敵意と運命に対する呪いという気持ちで助長して来たのであろう。これが、ユダヤの神が嫉妬心の強いものとして描かれるに至つた原因で、そういう他民族の繁栄を喜ばずそれに復讐する神に祈れば復讐が現実的にも出来ると考えざるを得なかつた。ユダヤ民族の精神生活の欠陥は実に憐れむべきものがあつた。従つて、嫉妬心が強いということは実にユダヤの神のその民族に対する愛情であり、またユダヤ民族の自民族に対する愛情の表現であつたのである。しかし、その愛情は言う迄もなく偏質的、病的の愛情で、よく無知な感情の強い母親等に見られる子供への溺愛というやうなものに相当するものと言えよう。かような溺愛がその子が一人前の立派な人間として育つことが出来ぬことは言う迄もないが、民族においてもそれは同様でかかる信仰を持つておるかぎり国際競争場裡にその国家の自立を保つことは出来ない。勿論、このユダヤ民族の神はその溺愛が極端なものであつた。そこに深刻な愛情を見ることが出来る。その深刻さは意義があつた、それは通り一遍の愛とは違ふのである。表面立派なことを言つても希薄な愛では何もできぬ。何も生まれぬのであつて、この深刻であるということはそれが偏質的であるという欠陥をある程度補つている。それ故、ユダヤ民族はその国家を保つことが出来ぬにもかかわらずその民族的團結だけは今日の独立を保ち続けているのである。このような民族的信仰を持つてゐるユダヤ民族の最大危機の一つにイエス・キリストが生まれた。キリストはユダヤ民族の悲惨な現状を直視した。そうして、この民族的信仰の内容、即ち信仰の態度に多くの誤りを発見したのである。

即ち、外国のものといへば何事によらずこれを斥けようとする保守主義はたしかに自国に対する愛情から

生ずるものであるに相違ないが、しかしその排他根性は直ちに個人間の生活にも移行せしめられるのが人間心理の法則であるからそこにユダヤ民族内部における分裂が結果されていた。元来この性格も亦すべて総合的に言つて、弱いユダヤ民族をモーゼが率いて歩いている間に非常に苦難に際会して、その民族の氣持ちを鼓舞しようとして自国のみを護る神の存在をその民族に教えたのが旧約聖書を貫く信仰であり、それがユダヤ民族の信仰を形づくっていたが、それはユダヤ民族が非常な苦難に遭い共同して外敵に当たっていないかぎり滅亡せしめられるようなとき、しかも偉大な指導者に率いられている間にはかような信仰もあまり弊害が生ぜぬ。しかし、その民族生活の緊張もそう長く続くものではなく、またユダヤ民族がともかくシリヤに帰つて安住することになると、直ちにこの人為的な精神作興政策の欠陥が現われてきたのである。それが民族内の分裂であつた。キリストがパリサイの徒とサドカイの徒との分裂を説いているのも、その両方の欠陥を指摘して正しい思想生活を民族の中に確立しようとしたのである。

かようなイエスの精神からすると先ず復讐主義は排斥せられねばならぬ。

「『目には目を、齒には齒を』と言へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗うな人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。汝を訴えて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。…』」(マタイ伝第五章三八〜四〇節)

と言つているのは、『目には目を』という旧約の復讐主義に対する修正を宣言したものである。また、
「『汝の隣を愛し、汝の仇を憎むべし』と言へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ。汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。…』」(同上四三、四四節)

と言つているのも同様である。そうして、キリストは隣人への愛を説き、それが仇敵にも及ぶべきものとして開展することを求めた。しかしながら、先ずキリスト自身が隣人、同胞を愛したること、決して普遍的に人類を愛したのではないことは、

「『我はイスラエルの家の失せたる羊のほかには遣わされず』」(マタイ伝第十五章二四節)
と言ひ、

「イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、かかる篤き信仰はイスラエルの中の一
人だに見しことなし、…』」(マタイ伝第八章十節)
と悲嘆し、

「遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言い給う『預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』
彼らの不信仰によりて、其処にては多くの能力ある業を為し給わざりき。」(マタイ伝第十三章五七、五八節)
と慷慨しているのによつても証される。

「『すべて分かれ争う国はほろび、分かれ争う町また家はたたず。サタンもしサタンを逐い出さば、自ら分
かれ争うなり。然らばその国いかで立つべき。…』」(マタイ伝第十二章二五、二六節)
とも言つて告げている。

キリストはこの博大な精神をこの国人に伝えることによつてこの国を護ろうとしたのである。凡そ、国家
防護意志は全人類に対する広大なる愛であること

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

の御製が明治三十七、八年に詠じいでしめたまえるものなりしことに仰ぎまつるべきである。

かくの如くして、キリストはユダヤを護らんがためにその信仰を普遍的なものにした。しかしながら繰り
返して言うように、それはユダヤを護らんがためであつたので漠然とした人類愛ではなかつた。単なる人類
愛というものは民族生活の歴史的事実によつて支持せられぬ、それは考えられ、作られた想定にすぎない。

しかしながら、このイエス・キリストの精神をユダヤ民族は容れることができなかったのである。イエス
は磔刑に処せられた。イエスの精神はその人類愛、隣人愛のみが抽出されて異国人の間に伝えられた。しか
しこれはイエスの念願でなかつたことは言う迄もない。ユダヤ民族のこの悲劇、それは自国を救わんがため
に真に正しき教えを説いた預言者を殺した。この悲劇はユダヤ民族の悲劇にのみ止まらなかつた。その影響
するところは複雑且つ広かつた。

先ず、キリスト教は数十年の後ユダヤを滅ぼしたローマを征服したのであつた。そのローマに滅ぼされた

ユダヤはキリストをローマに売ったものであったのである。ローマは権力をもってユダヤを征服したのであったが、精神的にユダヤを征服し得なかつたからして、反対にユダヤの愛国者によってのみ征服されたのである。キリスト教のローマ征服は宗教的生活の範囲に止まらなかつた。エルンスト・ラヴィスは「欧州史」のローマ帝国衰亡の原因の章に

「宗教的の革命は行なわれたが、それは帝国に反対してのものであった。『我が王国はこの世のものではない』という言葉は、この世のみで満足してそれ以上を知らなかつた異教的世界に対して神聖なる侮蔑を浴びせるものであった。『神のものは神に返し、カエザルのものはカエザルに返せ』という言葉は人間と神とが混同せられていたカエザルを神と区分することであつた。この区分が出来上がつては、どうしても神に対する負債がカエザルに対する義務よりも大きくならざるを得ない筈である。『天と地とは分かたるべし』という言葉は帝国の永久であるという予言を裏切るものであつた。『我はたよりなき帝国をあたえたり』という言葉も却つて実は不動の巖を揺るがすものであつた。」

と言つてゐる。権力によつてのみ諸民族を征服したローマは失敗に遭つておらなかつたから現世のみを肯定する思想以外を知らなかつたのである。ユダヤ民族は殆ど滅亡せんとする機会を幾度も与えられ、幾度も異民族に征服せられたからして現世の外に理想世界を求め、宗教が特に發達したのである。この現世の外を考へることを知らぬローマが現世の外に理想世界を求め、ユダヤを征服したのは当然のことであつた。

しかしながら、それは精神的領域迄も征服出来なかつたのは当然である。そうしてキリスト教は、ユダヤの滅亡とともにローマに入り来たりその統一が弛み始めた頃ローマ民族を精神的に崩壊に導いたのであつた。精神は人間生活の困難より生まれる。威力ある精神は常に悲劇より生まれる。ローマの安樂生活はユダヤの悲劇的生活に敗北したのである。ただ、ユダヤそのものもキリストを生んだことによつて滅びたのであつたが、精神生活と現實生活との調和は悲劇と幸福との交替であつた。それは、生命の律動の調和的開展より得らるべきである。喜び、悲しみの交替し、人生の起伏、脈動しゆくところに眞の幸慶のあることはこれによつて知らるるのである。ローマは帝国として滅びたがカトリック教の本山として栄えた。それが政治的統一

力をなお残留せしめつつ欧州各民族を支配したのは欧州諸民族が野蛮人であったからである。しかも、ローマンカソリックによる征服が欧州各民族をしてその神話を失わしめ、永久に欧州をして一ならしめる復古原理を破壊し近世列強の誕生とともに、ヨーロッパをしてその文化が進めば進むほどその分裂を深刻ならしめる原因をなしたことについては重大な問題があるからしてなお徹底的に考察せねばならぬことが多い。

かように、ユダヤ民族の悲劇は、その影響するところに深刻、複雑、且つ広汎であったのである。

そうしてかように、人間の生活、人類の運命は原因、結果の連続であって、それは無限に展開するものである。ユダヤ民族の悲劇と言っても、もしキリストの教えをユダヤ民族が信受したならばかかることは起こらなかったであろう、といつてもそれは仮定であり何らの意味もない。しかしともかく、あつたという悲劇があつたのでそれは既に事実あつたことだからそれについてとやかく言つても致し方がないではないかと言つてしまえば、それは一種の運命論であつて成るがままにまかせるといふ思考停止の状態である。そのような考え方は成立しない。キリストの教えをユダヤ民族が信じていたならと考えることは、それはどんなにユダヤ民族の幸福を齎らしたであろうと考える程度においては正しい考え方である。それは、ユダヤ民族に対する、またその過去に対する同情であるからである。しかし、それ以上その仮定から諸種の推論をすることになるとそこに誤りが生じてくる。即ち、ユダヤ民族の歴史そのものにキリスト一人の努力では如何ともしがたい国民生活の破綻条件が備わっていたからである。その諸条件は今ここで追及している暇はないが、たしかに如何なる点であるとこれを分析することが出来る問題である。キリストも確かにかかる滅亡の諸条件の中から生まれたものであつた。何となれば、キリストも国民生活の部分的存在にすぎない、それは名もなき職人の子として生れたばかりでなく、キリストの教えそのものがあまりに宗教的でありすぎた。それは政治的解決の具体的方途を提示するに至らずして終わった、否、それを提示し得る可能性もそこにはなかった。それはキリスト自らの悲痛な気持ちからその悲劇的運命を選んだようなものであつた。その所説が国民から容れられなかったのも一つはキリスト自身の罪でもあつた。あまりにも宗教的でありすぎた罪であつた。しかし、それは致し方なきことであつた。個人の力は如何なる場合にも万能ではないのである。

こう考えてくると、「普遍的人格を得た」というのは、むしろ時期から言えば、キリストの死、キリストに對する異国民の間の礼拝が始まってからであると言うことができる。キリスト自身が従来の神以外の神を説いたのでもなく、またその神の性格の概念について修正を施したものでもなかった。キリストの改革したのはこの神を礼拝する態度についてであった。その修正が結果として神の性格の修正となったのだ。だからして、むしろキリストその人を礼拝するようになってから神の性格が変化したと言う方が当たっている。そのとき異国民が礼拝した神は、その名はキリスト自身はキリスト自身が礼拝した神であるけれどもその内容はキリスト自身であり、ユダヤの愛国者としてのキリストではなく、またユダヤの精神的改革者としてのキリストではなく、一宗教家としての、福音の使者としての、また愛の宣説者としてのキリストであったのである。

それ故、キリスト教はユダヤの民族宗教ではなく普遍的宗教、世界宗教である。しかし、全く普遍的というものはこの世に存在せぬのであるから、ユダヤ民族の精神的性格がその中に存して去るべからざるものとして残留しておるということについては、これを常に深く考えて行かねばならぬ。キリスト教を信ずるといふことは、それ故、ユダヤ民族に深い同情をすることであり、またユダヤ民族の滅亡、ローマの精神的能力の欠落の故に味わざるを得なかったキリスト教による征服の運命、またそれから総合して結果した欧州各民族の固有の神話を喪失したる悲しむべき運命、これら凡てに對する同情ということであるべきである。その同情は日本国民として必要のことである。それ故、日本国民はキリスト教を信ずべきである。

そこで、ユダヤの神が普遍的な神格を得たということが良いことであつたし、また悪いことでもあつた。それはユダヤ民族にとつても良いことであつたと同時に悪いことでもあつた。ローマにとつても良くも悪くも悪いことでもあつた。しかしながら、それを一応分析することは出来るが一方的に良かったとか悪かったとか言うことは出来ない。それが歴史ということである。しかしながら、諸民族の悲劇は日本の生成する条件である。各民族の悲劇は宇宙の歎息であるべきである。そうして、それは日本の歎息によつて証せられる。欧州はまだ一文化単位として成立しておらない。その各民族は個々の神話を喪失してしまつた。神話を喪失したために帰るべき復古原理、あらゆる文化の分化開展が統一歸向せしめらるべき原理を喪失してしまつた。

それ故に、欧州各民族は互いに他の民族文化を余すところなく撰取することは出来ない。ここに欧州が一つの統一体となり得ない原因がある。

今次大戦によって、既に旧来のドイツ、或いはフランスという位の面積と人口と、従ってその文化的包摂力とをもってしては今後の世界にその独立を保つことが困難なることが実証せしめられた。所謂レーベンス・ラウム(生活圏)の説ある所以である。しかしながら、欧州においては旧来の独仏以上の統一体の生成には非常の困難がある。欧州の不統一がその文化的末流として米、露をして如何なる立場に導くかが問題である。米は確かにその人にもまた物質力も勝れておる。しかしながら、今次大戦における米国の立場は欧州の争乱に対する割り込みに過ぎぬものであって、その民族としての必然性をもったものではなかった。かかる戦争において勝利を得るということは、自国のやむべからざる主張の勝利ではなく侵略意志の勝利となるからして、その侵略意志はアメリカ国民の精神生活を破壊すること当然である。従ってこれも亦文化的統一体となることはできない。ソ連の立場は米以下である。そうすると、欧州諸民族の悲惨な運命はこれを救済するものを必要とすることになる。その固有の神話、信仰を失わずにおる日本以外にそれを求むべくもない。諸民族の悲劇が日本の歎喜であるという以上に悲しくもまた喜ばしき世界史の運命はない。それは人類の運命であるとともに宇宙の運命でもある。宇宙の運命というべくもないからしてそれは宇宙の事実そのものである。

(昭和十九年六月 記日不明)

第四講 当今の所謂日本主義について

日本主義と言われる人々に対しては、特に批判してゆかねばならぬというのはそれが必ずしも敵であるから

というのではない。しかし、大体同傾向にあるということが嚴密の批判を意志せしむる原因となり、それが自分の思想そのものの純一性保持ということの妨げになるからして、よくこれは警戒せねばならぬのである。

しかし、政治的行動の場合には妥協が必要であつて、またそれが正しいのであるから、何でも自分等の考へ通りでなければならぬというのはもとより間違ひである。

日本主義の面々はキリストの立場からいうとパリサイの徒に当たる者が多い。また世界主義、個人主義の連中、つまり大学や評論界における自由主義者はサドカイの徒である。この二つながら国を護るものでないことは、キリストの場合もそうであつたが日本に在つても同じである。聖武天皇が「三宝の奴」と仰せられても、それは外国宗教の奴隷となると仰せられたのでは勿論ない。広大な御慈悲からする謙虚なお心持ちの御表現である。すべて歴代天皇の大御心は博大無窮であつて、臣民の測度し奉るべくもないのである。それを測度し奉り、また批判し奉るところに臣民の欠落がある。如何に日本主義を唱えても聖武天皇や仁徳天皇に對し奉り批判者の立場に立つのであればそれは日本主義ではない。日本主義は日本臣民の人生觀である。

聖徳太子は特に仏教、儒教等外国文化撰取の指導者として、天皇に對し奉る臣の立場を守られたことに深い御心を仰ぎ奉らねばならぬ。皇位の尊嚴を汚さぬようとの御配慮であつた。外国文化は如何に華々しくとも日本国家生活にとつては部分的素材である。その選択は一度誤れば日本の存立に影響するのである。それ故、「事成れば其の功を君に歸し、事敗るれば其の罪を身に負う」の立場を守られたことは、日本国体の尊嚴を何人よりも重視したまいし証拠である。そうして、この大事業は千三百年を要するものであつたからして、先ずその最初に着手遊ばされた太子の御一家の悲劇は止むを得ざる出来事であつた。その悲劇によつて太子は国を護られたのである。物部、大伴の誰にこの勇氣があつたであらうか。以上

別紙書きましたこと、相當に重要な問題があり充分考えていただきたいと思ひます。しかし諸君、私はこれ迄諸兄に分かりよいようにと思ひまして理論的に色々述べて参りました。それはまことにとるに足らぬこととであります。本當に何よりも神に礼拝し、生活の律動を客觀化するために詩作をすること、これが大切であります。知的考察は用意に過ぎません。それは我々の生命を閉ざされたものにしがちであります。大きな

国家的生命への融合、交流を妨げがちであります。形式的な儀礼に固化するのはもとより排すべきですが、それにはシキシマノミチの表現がこの凝固を防ぎましょう。

今日までの学問、物を読んで考えるということ、それが如何に小さい力しかもたぬものであるかが次第に証せられて参るでしょう。戦争の困難はこの神話の図示を、神代を、いままながらの実現を促します。そのとき英雄及び神々は生れるであります。そこに生れる英雄はエライ人間、人物、人材ではなく、神さながらの忘我の活動に身をゆだねる民族生活の力の具現者であります。諸兄はかかる民族の力さながらの象徴とならねばなりません。諸兄は神を拝さるべきです。そうして祈念をこめるべきであります。最大の困難時に、人の心失いしときに、勝利を確信する人となるべく、神のいのちの全くあらんことを念ぜらるべきです。諸兄の生命は国家の運命に繋がっているのであります。戦争が諸兄に何を要求しているかを思わなければならない。それはまことの信であります。「群臣共に信あらば何事か成らざらん。群臣信なきときは万事ことごとく敗る」と太子は教えさせ給うのであります。

直接経験の表現としてのコトバが人生事実の活力を伴っておるからこそ、それは威力観念、クラフト・イデーである、それが詩の本質であります。と、三井先生は文理大新聞への寄稿の中で言っておられます。この信を我等は実現して参りましょう。諸兄の信は多くの無数の人々に伝えられて行きましょう。そのとき、臣道は確実の現実行動規範として国民生活を規定しましょう。そのとき、君徳は輝き給うであります。おおみいつは第一線ばかりでなく国民生活そのものの上に輝き奉るであります。戦争はかくして確実であります。諸兄の信の問題は戦争の勝敗との直接関係下にあります。

朝夕神を拝し御製を拝誦せられるよう祈ります。我々は全てこれを実行して参りました。

(昭和十九年六月 記日不明)

第五講 外国文化摂取の態度について

外国文化を摂取するのに、それに溺れてしまつて、そして徐々にこれを批判していくのがいいか、また始めから批判的態度に出て取るべきを取り捨てるべきを捨てるのがいいか、ということは無論後者が良いに決まつている。しかし、そういうことは却つて出来るものではない。たとえば、外国文化といつてもそれは複雑な内容のものでその中から何を取るべきか、何を捨てるべきかを見分けるといふことは容易に出来るものではない。長所が同時に短所であるというのが、人間個人にとつても言い得ると同じく、民族文化においても言うことが出来る。英国が非常に理性的であるといふが、それは世界各民族を操縦していく能力を備えているといふ点から言えば長所であるといふが、内部的に分裂する可能性をも包蔵している。それは米合衆国の獨立に既に現われた。また理性的であるといつても、その反面には非常なる野獸的な意欲を蔵している。その情熱は情熱的といわれる仏蘭西人以上であるかも知れない。かように一民族の性格といふものは、その民族の成立ち、歴史のあらゆる条件によつて決定され、それには複雑な内容が包蔵されておるので、直ちにその中でどれを摂取しどれを排除するかといふことは不可能に近いと言わねばならぬ。またその良いところを悪いところから切り離すということも不可能で、その善悪、美醜、長短が溶然として一つの生命になつているのである。文化は生命である。それ故それは一体として総合的に考えねばならぬ。長所といふものがそれ自身として存在しているのではなく、一つの性格が他との調和において發揮されたときに現われるのが長所である。短所といふのはそれが他との調和を失したときである。だからして、長所とか短所とかいふものは同一のものの表れ方の相違にすぎない。また、その一つの性格といふのもそれが獨立して存在しておるのではなく一定の事態に遭遇した場合に全体の意志が現われる形式また傾向であるから、その全体が調和がとれている場合は長所が現われ、調和を失つている場合は短所が現われるわけである。それ故、文化といふものもこれを簡単に分析して取り入れることは出来ない。眞に摂取するといふことは、自分の獨立、自主性を保ちつつ、他の文化を融合するということであるのだ。だからして、それは戦いでもある。摂取する方が勝

利である。される方が負けである。融合というのは統一であるからして統一力の強い方が結局勝つのである。そうして、その統一は自己を主張することでもなく、作為的に統一を図ることでもなく、宇宙的な統一意志の作用であるからそこに自他の境界を立てようとする小我見はないのである。

そこで、日本は常に最悪の事態を最優秀の結果に転化してきた国であるということが出来る。最悪の事態というのは最も調和のとれぬ場合である。それを最も調和のとれた事態に転化するのが日本の歴史であった。その統一力が日本国体であった。また日本文化であった。日本は世界人類の苦悩を負うてきた。それ故、決して要領のいい国家生活ではなかった。しかし、人類が生み出したものを、ことごとく自分の体験に織り込まねばおられぬ衝動が支配してきた。その十字架を負う(西洋流の表現に従えば)者の使命は世界の救済である。この文化的自覚は今日戦勝への根本的力である。かようなところから、我々は大みいつの内容を分析的に理解しまつろうとするのである。今次大戦が世界文化のための根底からの戦いであるといふのはかかる意味からである。経験は失敗であるといふのは意志あるものの表現である。「いい経験をした」などという言方はその経験が力ある経験でなかった証拠である。「禍福はあざなえる縄の如し」というのも分析的理解である。これらは作為しようとする人力のはかなき努力への信頼であつて、その限界に達したとき、即ち世界史の審判のときには全て崩れ去る虚仮相にすぎない。

歴史上のことを如何なることが正しいかということとは簡単に言えぬのである。言い得るのは日本が正しいということのみである。例えば、征韓論の問題で西郷派のみが正しいといふのは部分的なる見解で正しい見方ではない。ただ、西郷等が朝鮮の我に対する侮辱に憤り、且つ日本の大陸への発展の重大意義を常に考えておつたところにその衷情が伺われ、また西郷に対する人氣が今日迄絶えざる所以である。しかし当時の国力を考えるとそれが必ず策を得たるものであつたか否かは不明であり、殊に反対が非常にあつたにもかかわらず固執、強行しようとしたやり方は正しいものとは言えぬのである。西郷は、自分等と西洋を視て来た者等との間にこのような溝が生じた原因を重大視して、その解決に先ず当たるべきであつたのであるが、渦中にある西郷にはその大局的見地は生れなかつたのである。それは今日から歴史を視る上にも、かかる両派分

かれて争つたことの歴史的意義を考察すべきで、個々の条件から、また色々の条件により、種々の見地になつて分析して得られた歴史的省察を統一して、歴史はかかる分析的見地では遂に理解すべくもないということを深く知ることが歴史哲学であつて、歴史を學ぶという事はそこに到達することである。それは過去のあらゆる悲劇を今日に対する関係において、今日の歴史の統一的生命に帰せしめんとする態度である。これが日本を護るということである。

〈学生諸君のなすべきこと〉

今日の時代は眞の英雄を期待するのである。歴史哲学的修養をした者が今日の英雄である。学生諸君はこの英雄にならねばならぬ。かかる英雄たるためには學問が必要であるが、それは一般知識人の全てに要求せられ得るものではない。それ故、學識とともに意志を持たねばならぬ。現在の英雄は意志ある学生の間から生れるのである。

意志は鍛錬せられねばならぬ。しかし演習では眞の訓練は出来ない。実戦にまさる訓練はないのである。思想戦は実戦である。学生諸君はこの思想戦に携わるべきである。思想戦というのは批判ということと同義語の如く原理日本社などでも誤り考えられてきた。しかし、思想戦というのは思想を統一する努力ということである。批判は一人でもできるが思想を統一することは何よりも友情の問題である。共感の世界を拡大し、その世界の性格を現代において明らかならしむることである。学生諸君が學生間の思想を統一する努力を行なうということは、直接どれ程の戦力となるかは測定できぬが最大の戦力となることを信じてそれに邁進すべきである。

これは一つの事業である。若い時代にこの事業を遂行するということが、実に重要な修養である。学生諸君は今、教育界、政界を支配しておる退嬰的意志、陳腐なる考え方、妥協、形式的思考、これらのものに対して徹底的に戦わねばならぬ。ここに戦勝への道があることを認識すべきである。

都下に、また全国に大学生運動を展開すべきである。ともかく真に戦争に勝利を得んとする意志なき現代日本の指導者達と徹底的に戦わねばならぬ。諸君は英雄とならんがために、学生時代を単なる準備期間と考へる従来の考え方を脱出すべきである。青年時代に大業をたてるといふことは、それが失敗すればなおいいが、大いなる修養となる。今日の時代は青年にかかることを許す余地がなかったことがいけなかった。しかし意志ある者にかかる余地を作り出すのである。

諸君の行なうことが直接最大の戦力となるような大事業をおこすべき時は今である。

(昭和十九年六月 記日不明)

第六講 道元禪師の「正法眼藏随聞記」について

道元禪師の「正法眼藏随聞記」を見ますと次のようなことを言っております。

『衲子は雲の如く定めたる住所もなく水の如く流れ行きてよる処もなきをこそ僧とは言ふなれ。縦ひ衣鉢の外一物も持たずとも、一人の檀那をも頼み、一類の親族をも頼むは、即ち自他共に縛住せられて不浄食にてあるなり。』

マタイ伝にも

『…子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顕すところの者の外になし。凡て勞する者、重荷を負う者、われに來たれ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり。』(マタイ伝第十一章二七―二九節)

と言つてあります。道をふむ者の一生は要するに人の為に、国の為に己れを捧げる生涯であります。永久

に安住の処もなき者であります。私は去年留置場におります間「真宗聖典」を反復読むことが出来ましたが、その中で最も心をうたれたのは親鸞の帰洛に関する伝記の一節でありました。「新撰聖典」の真宗略史に

『かように二十年間の行化は東国の地に真宗教団の萌芽を發生せしめた。然るに、親鸞はその教団を離れ家庭を別れて、独り漂然として帰洛の途につかれたのである。従來の伝では貞永元年祖聖六十歳の秋と云うておるが別に確証があるわけではない。思うに六十歳以後六十四、五歳までの間のことであろう。何故に帰洛せられたかについては古來その消息を伝えたものがない。現存する諸種の資料を総合して東国時代と帰洛時代を比較するに、その行跡の上において頗るその趣を異にしておることが知らるるのである。即ち、前は殆ど行化時代であるが後は寧ろ隱棲生活である。それには無論幾多の原因があつたろう。けれども祖聖自身の上に内的轉換のあつたことを思わざるを得ない。〈小慈小悲もなき身にて有情利益はおもうまじ〉といひ展に伴つて租聖をして人師たらしむべく余儀なくした為ではあるまいか。帰洛の主因をここに認めるのは或いは憶測の嫌いがないでもないが、帰洛以後の生活が東国に比して寧ろ長かつたのに反して全く新しい教団が出来なかつたことは祖聖帰洛の原因が前述の理由であつたことを反証しておることであろう。租聖の帰洛は越後配流から殆ど三十年の後である。山河は旧のままであつたが社会はいたく變つてゐる。吉水会下の道友全て多く故人となり、嘉祿、安貞の法難に四散して訪うべき人もない。それのみならず日野一門の人々は仙洞に伺候する身であつたから、承久の変に關係したために(親鸞は日野氏の出)北条氏からその領地を没収せられて頗る惨めな境遇に陥つておる。〔伝絵〕に〈聖人故郷にかえりて往時をおもうに年を閲し、夢のごとし、幻の如し〉とあるのは實によく当時の聖人の感懷を道破したものであろう。〔伝絵〕の著者は語を継いで〈長安、洛陽の栖もあとをとどむるに懶しとて扶風馮翼とところどころに移住したまいき〉と云うてゐる。恐らく処定めぬ寄寓生活であつたらう』

とあります。親鸞の仏教、宗教改革、それはルーテルのような政治的に華々しいものではなく、無涯底の悲哀をたたえたこの生涯によつて成されたことが偲ばしめられるのであります。

親鸞は御同朋衆といひ同信生活のこの上なき協力を実現したのですが、同信の友らの眞の協力を念ずる親鸞は再び孤独な自分に帰らざるを得なかつたのであります。この略史の筆者が〈祖聖をして人師たらしむべく余儀なくしたためではあるまいか〉と述べ、そこに親鸞が苦痛を感じ、そこに厭離の情を催したごとき語勢を示しておりますが、それは必ずしも当たらないと思います。何となれば、親鸞の消息集を見れば残して来た東国の人に対する深い愛情が見られますからです。親鸞は、むしろ教団の人々を思えばこそ自分が長くその間に留まつてはならぬという気持ちに誘われたのであると存ぜられます。親鸞には人を、まして友を憎むなどという気持ちがあるが、余地は存すべくもなかつたのです。そういう心持ちに關しては親鸞は全く無力そのものであつたのであります。親鸞がただ憂えたことは、自分の足らざる心が教団の人々の信に障害をなしていはせぬかという事であつたのであります。そうして、親鸞はその苦惱多かりし六十年の生涯を、再び一層の苦海に投じ、当時信仰上の争乱の渦が巻いておつた京都へ新しい戦いを挑みに老軀を励まして出陣したものと思われるのであります。もとよりその新しい戦いはただ親鸞の心の中において戦われるものであり、論争とか法論とかいうものであるべくもなかつたのであります。

親鸞が「愚禿鈔」のはじめに

賢者の信をききて 愚禿が心をあらはす

賢者の信は 内は賢にして外は愚なり

愚禿の心は 内は愚にして外は賢なり

と言つているのにも親鸞の心は何わられるのであります。私には到底親鸞の深い体験とその底知れぬ心とを測ることは出来ません。

しかし、去年の半歳にわたる留置場生活は、私にこの親鸞の心を今更のごとく想憶せしむる機縁を与えてくれました。私は何と言つて感謝してよいのかわかりません。親鸞、それは何と云うさびしい心の持ち主でありましょうか。親鸞こそは国民生活のさ中に生きた人でありましょう。私は親鸞の悲哀を汲み尽くす力はありません。しかし、去年の事件から、私の嘗て七年間を要した療養生活の為に余儀なくされた寂寥の感を

倍加するに至ったような気がします。

私は今日諸兄とかくして信を語り合う生活を送りまして尽きせぬこの世の悦びを味わわしめられております。しかし諸兄がその信を開発し、顧みる余裕もなくみ国のために尽くさるべきときを思えば、私は諸兄と別れる時のことを切迫した感じに思わざるを得ません。そうしてその時は必ず近いうちに参りましょう。私どもが友を得るといふとき、それは自分が心より尊敬するに価する友を発見するといふことであるべきであります。私は諸兄が私をはるかに遠く越えた偉大なる人格となられんことを祈るのであります。そうして、私にもまた凡てを忘れて活動せねばならぬときが来ると思っています。諸兄に対して何らかのことを説いた私ではなく一人真裸の人間として、身軽な一個の国民として、しかしながら溢るるとき憂国の熱血をたたえて殆ど一塊の火炎として諸君の前にあらわれ、ここに現われては、また彼処にあらわれ留まることなく国事に奔走する自分を見出さむこそ、私の今日の衷心よりの願いであるのです。

—以下脱落—

しかしながら、配流、僧籍剥脱の刑にあうことによつて、親鸞は法然の教えを真に信受するようになったのだと思われます。「歎異抄」に

「たとひ法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」とあるのにそれが知られます。単に法然の教えを受けるところには多くの人が集まったのであります。何となれば、流行宗教家、新興宗教家として有名な法然のところには多くの人が集まったのであります。にもかかわらず、親鸞のような深刻な思想を持ったのは殆ど稀であつたからであります。否、これは一般論としていふことができます。人の教えを受けるといふことが自分の体験として生かさねぬ限り、それは殆ど無意味のことであるといふことが出来ます。何よりも国民思想は国民生活の所産であります。親鸞は何によりその現実の運命を信受したのでありましようか。彼の信は国民生活に対する信であつたのであります。その避くべからざる運命を信知して彼はそれを表現したのであります。彼の著述は普遍的教義の叙述というよりは回避すべくもない運命に対する悲嘆の告白であるという方が当たつております。その回避せざる態度は彼の

生の威厳でありました。それ故に、その教説が具体的であつて客観的であり、そこに高き価値が賦与せられたのであります。そこで、私どもも概括的叙述をする場合には非常に注意せねばならぬのであります。我々は、常に具体的問題をその条件の正しい分析のもとにおいて叙述すべきで、そこにかへつて客観性があたえられることをおもうべきであります。そこで、私がいま諸兄の前途をおもひ、それはかくあらん、かくあれということは大して重要なことではありません。同信生活の将来がどのような形をとつて展開してゆくであろうかということは不可測だということはで概括するより外はありません。そうして、それが最も具体的な言い表し方であります。不可測であるということは、我々が考えて見るよりはるかに重大な意義を持ち得るということであります。それ故、考えぬということではありません。考え及ばぬことの方が、考えることよりも重要であるということでもあります。

桑本君が「皇国の道は嚴として存在している」と言つたのに対して私は大いにこれを責めたのであります。このような言い方が全く空漠、無意味なものであることは、以上の叙述からよくおわかりになると思います。「私は日本精神を究めたい」とか「私は日本文化の精神を明らかにしていきたい」とかいうことも、同様に空漠な言い方であり、考え方であります。「臣道」とか「神ながらの道」とか「草莽の悲願」とか言つても同じことであります。今日の時代が如何なる時代であるか、自分はその中であつて如何に生きんとするか、それが具体的問題であり、それを考えることが眞実の精神であります。それ故に、我々は時代に対する見解を確立せねばなりません。またそれに従つて時代を改革せんとする意図を抱き、実行に移るべきであります。私今、此等のことを諸兄に申しあげるのも、私がい実際に時代に対する認識から、改革の意図を抱き、それを実行に移し来たつた体験から申しあげるのであります。即ち、小生としては、自分が、少なくとも高等学校時代以来人生のことを思い、日本文化史上の偉人の書を読み、明治天皇御製、聖徳太子憲法、三経義疏を拝誦し、黒上先生、三井先生に師事し、学校教育の弊を満喫しつつ、それを正さんと念願し、やがて政治的改革を意図して失敗し来たつた体験を語ることに眞実であり、また、この自分の運命に密着してあらゆる問題を考え、将来を予見し、現実に処すべき道を考え、また諸兄と協力する方途を見いだして行くことが眞実な

のであります。親鸞が激越の語調を以てその体験を語った如くに、私も亦自分の経験を顧みるとき言うべからざる感情の湧いてくるのを覚えます。それは、先ず悔恨であり、また諦観であり、確信であり、悲哀であり、歓喜であるとともに勇氣でもあります。十有七年、それは過ぎ去った日月であるとともに現在でもあります。私は、時代を分析するとき同時に自分の辿つて来た道を厳正に分析、反省せねばなりません。諸兄もまた、数ならずとも私の申しますことに共鳴し、そこに触発せらるる感情の抑揚に人生を実感せられつつ幾月かを送られたのであります。こうして、一般抽象的に忠義を尽くす、忠義の學、臣節の學、或いは日本精神の究尽などということは第二義として、同信ということを経験的情意また判断と、その意義を正確に限定して今後の協力を進めらるべきものと信じます。

諸兄が今日の生活の中で一番手近に感じられることは学校生活に対する不満であります。それは何故にあき足らぬものであるか、諸君は青年としてその中に充實し行く精神的、肉体的エネルギーが生躍動と拡充とを求めていることを感じられるではありません。主観的に言うならば本当の、心の底からのよろこびを求めて居られるのであります。またそれが与えられる条件、即ち眞の苦闘、変化、生活の起伏を求めておられるのであります。そうして、それが単調にして内容乏しき学校生活において与えられぬからして多くの不満を感じられるのであります。その単調なる生活が生躍動に触れず、情意の抑揚を促さぬからして空虚を覚えられるのであります。それを別の見地からみるならば主観的立場の明瞭でない学問、研究方法についての反省のない学問、詩と宗教のない生活、詰込み教育、無意味な統制、そういうことになると思います。私どももかかる学校生活に心底からの不満と憤激を禁じ得なかつたのであります。しかしながら、これは何も学校生活に限られたことではなく国民生活一般について共通の現象であると言えます。例えば、研究方法についての反省のない学問ということと無責任な政治や行政、またそれと経済界の〈不明〉主義、各方面の立身出世主義、芸術界の享樂主義、繪画や建築に表れる裝飾過重傾向、音楽では器樂万能の偏倚的、耽美的傾向、法科万能法治主義傾向、国防の欠陥、軟弱外交、あらゆるところに共通する傾向であります。ただそれが、これらの諸傾向は一種の結果であるに對して、教育の方面はその根源的のものでありますから

重大なる意味を感じ、またそれが各方面の現象として間接に感得せらるるのではなく、魂の形成そのものに及ぼす直接的力であるところに激しい生命的反発を覚えしめる理由があります。そこで、我々が直接受ける教育のこの傾向は直ちに全国数十万の優秀なる日本青年の魂を殺すものであるという省察、それ以上に直接に我々自身の生涯を、運命を決定する否定的魔力であるという反省と、それに対する反抗の衝動とから、学校生活を通じて時代を見たのが我々の学生運動のはじめでありました。また、そのような学校教育と戦って行くためには、自分の精神的実力が十分養成されねばならぬこと、自分の精神生活において時代との戦いは行なわゆることを痛感したのであります。ここに我々の同信生活の現実的連帯性があつたのであります。日本の文化に対して同一の見方をするとか、将来長く友人として交わるといふことではありませんでした。時代を思い、同胞の共通の生を思う故に、時代を思う故に、同一の精神的苦悩を覚え、その解決に力を合わせたのが、我々の同信生活でありました。同信生活とはもとよりかくの如きものであると信じます。

親鸞や道元の時代は、かかる明瞭な意識も概念も成立せぬように国家生活の各部分が分かれていた時代でありましたが、しかし、その実内容を客観的に見るならばもとよりかかるものであつたのであります。私が前述しました学問、亦その他の宗教、芸術、政治、道徳、万般の国民生活の傾向との関係、これについては、私の講義速記や三井先生その他のの方々の中のものの中に分析せられて説かれておりますからよく御研究になりたいと念願致します。いまここで、それを細かく述べている時間はありません。

ここに、共通の苦悩を味わう同信の友への友情、それは微妙に作用する自他の関連についての感情、友を思う気持と自分を顧みる気持との交錯、などによって非常に濃やかなものとなり、またその濃やかな気持を他の国民同胞にもおしひろげることとなり、我々の精神生活ははじめて国民生活の中に没入してまいるのであります。三井先生が

呪いは時代に

愛憐は個人に

と歌われた気持であります。かくの如きが信の世界であります。

(昭和十九年六月 記日不明)

第七講 サイパン陥落

昭和十九年七月九日これを記す。今朝刊はサイパン島重大関頭に立つのニュースを掲げておるが、恐らく最早玉碎したものであろう。今朝、去月下旬の御前会議の内容を少し聞くことを得たが、その御前会議の前日サイパン在島の婦女子を悉く我が手によって処置し、その旨御前会議において奏上したということであった。その二、三日後に皇太神宮に行幸があったということについては真否は未だ確かでない。

敵の本土上陸は最早時間の問題であるという。右の御前会議において連合艦隊を敵の上陸作戦に備え本土防衛のためにのみ用いるということを議決定したということであるが、東條は依然としてその軍政専制者としての地位を保たんとするのであるという。しかしながら敵の本土上陸を防衛するものは連合艦隊のみであって、本土には何一つ備える用意はない。兵器という兵器は全て前線にあり精鋭部隊は全て第一線にあって何らの用もなさないのである。恐らく今夏の内に敵は本土の一角に上陸するのであろう。そうして、その橋頭堡を次第に拡大しつつ無防備の本土を席卷するに違いない。それが敗戦でなくて何であるか、これが日本がその歴史上未だかつてなかりしと言ひ伝え来たった外敵の本土侵寇でないか誰人が強弁し得るものぞ。否、亡国とはかくのごときものではなかったのか、日本国民が一度も考えたことのなかった亡国とはかくのごときものではなかったか……

昨年、印緬作戦が開始されたとき、私は全く陸軍の人氣取り政策に過ぎず、海軍に対する国民の信頼を嫉妬して不必要のところを兵を用いて政治と戦争とに無知なる国民の陸軍に対する信頼を海軍のそれより奪取せんとするものであるとなした。果たして印緬作戦は雨期に入って膠着し、既に收拾すべからざるに至って

いる。広大な印度に兵を進めれば支那事變の二の舞をすることは目に見えておつたし、また何個師團かの兵力を印度に送つたとてそれで印度の独立運動を些かでも刺激しそれが英国の国難を示すであろう等とは考えうることはなかつた。しかも陸軍が印緬作戰への必要を楯にとつて飛行機の海軍とのパリテイを要求しそれが陸海軍の相克を激化したとの報を聞いたのもそれから間もないことである。それももう半年近くも前のことである。戦線を急速に縮小し敵の侵寇に頑強なる備えをなすべきであつたのに單なる功名心により多数の精銳を送り重大な機を逸したことは近来における取り返しのつかぬ大問題である。

恐らく独逸よりも日本の軍部が参るのであろう。何となれば独逸は大陸国である。陸軍の進撃度には一定の限度が規定せられている。殊に数百万の軍隊が何百軒の国境を守っている現代の戦争に於いて然りである。これに対して日本の場合は全く異なる。大機動部隊の侵寇は一昨年ソロモン海戦以来の加速度的進度によつて見るがごとくである。敵は徒に戦線を拡大して手薄になつた本土をこそ目標としてくるに違いない。大東亜共同宣言などによつて虚勢を張つた政府の面目を維持せんためのみ行なわれた印緬作戰のごときが戦争の末期になつてなお如何に大なる危険の原因になつてゐるかを思うべきである。もし日本本土に堅固なる防備があり海軍と航空部隊とが密集してこれを守つてゐたならば日本程強い国はないのである。しかしながら一党支配のための虚勢を維持せんために行なわれた放漫戦争の結果は極度の弱国となるのである。専制者は敗戦の事實を見て愈々その国民に対する強圧を強化し来たりつつあるが最後の危局においては自ら最初に崩壊するのであること歴史の証明するところである。

敵は本土に上陸するのであろう。物量々と米国人と同じ事を言つてきた日本の陸軍は最初に白旗を掲げるであろう。恐らく東條には自ら死を以て国を守る精神はあるまい。彼は前皇帝カイゼルのごとく自らの退職を以て戦争は終わる位に考えておるのであろう。ともかくも今日の状態に根本的变化が行なわれぬ限り、敵の本土上陸、我が軍の降伏、これはこの夏、秋の候に行なわれるのである。

前大戦における独逸敗戦の経路を書いたもの、またアンドレ・モロアの「フランス敗れたり」等を読んで、それを今日の日本に当てはめるとき、そこには唯一つの相違もない。降伏の前日まで多くの国民はなお一縷

の望みを奇跡の惹起につないでいるのである。目の前に見えるものは生活の徐々の変化、肉親や友人の応召、食料品その他物資の不足、戦局の諸ニュース、爆撃、形式的挙国一致、部分的欠陥除去への汲々たる努力、しかしながら根本的欠陥修正への一切の努力の放棄、そうして来たるべきときを徒に待ったその姿は今日の日本も前大戦の独逸も今次大戦のフランスも全く同一のものなのである。ただ今日の日本は未だ最後が来ていないだけである。そうしてその国民はそれを深く事前に知ることができぬばかりか、事後に於いても真にその意義を知ることが出来ないのである。カイゼルは退位した、ペタンは臨時政府を建てた、それだけのことである。独逸におけるインフレーションと国民の受けた惨苦、それは遙かに後に起こったことであつたし、またそのようなときにすらもこれに何とか処して国民はともかくも生きた。フランスの敗戦は今日第二戦線の攻防戦によってその国土は相対する外国軍との交戦場と化しているが、そこでの国民の難苦にもかかわらず、フランス国民は尚生きてゐる。亡国とはかやうのものだ。それは断じて個人の生死と同一内容の問題ではない。しかしながらその重大性は精神的直感のないものには些かも認識されることなくして終わるものである。日本の危機はこの精神的直観力を国民から奪つたところから将来され今やそれは決定的になりつつある。国民が今日のこの最大危局について知るところのないのは知ろうとせぬからだ。それは精神的直観力の欠落からきている。そうしてこの直観力の欠落から考えられぬ危機が実現される。亡国がそれである。日本国民は、殊に志ある人々は日本国民が歴史上未だかつて考えたことのなかつた、また今日も考えることを極力回避しようとする亡国ということが如何なることであるかをいま深刻に考えるべきである。

もし、天皇が夷狄によって退位を強制せしめられ給うごときことがあつたならばそれは日本の亡国である。たとえ皇太子殿下がご登極遊ばされたとしても、それは夷狄の手による擁立であるからして日本は既にその時亡びたと考えねばならぬ。否々、天皇陛下が夷狄の前に膝をつかせ給ひ皇太神宮が醜虜の靴によって汚されるごときことがあつたならば三千年の日本はその時既に亡びたと言わねばならぬ。しかしながらその何れも今日この状態が続く限り当然避くべからざることである。今日何をなすべきかを考えるについても、先ずこの事実を直視しての上でなければならぬ。多くの人々は時局ニュースを聞き、サイパン玉砕を聞いて憂色

を湛えるけれどもそれ以上を考えようとはせぬのである。事実とはニュースではない、過去の出来事でもない。過去より現在に繋がり将来を決定する事実である。最早、起こり得ることは推測ではなくして来たるべき事実である。それを如何にして修正するかは同じく過去に遡ってでなくしては出来ない。軍事専制排除と思想指導の是正と、この他には依然として不敗の道はないのである。

天皇親政を否定し自らの党派的独裁を意図し、なおそれを保持しようとする者を除かぬ限り不敗の道はあり得ないのである。最早戦勝への只の一途すらもない。敗戦と亡国とは避くべからざる一途である。しかも我らはただ全国民一人の驕るもの無く一人の怨むもの無く、全国民全滅の道を進もうではないか。サイパンは既に在住婦女子を皇軍の手によって処置した。日本はただ一人の専制主義者もただ一人の篡奪者もただ一人の吾一人生きながらえんとする者なき状態において全滅したいものである。永遠の宇宙にとどめるべき日本のこの潔き全滅の歴史こそ世界の誇りではないであろうか。また、もしかのごとき覚悟をもつて戦った場合に、万一の神の守りがないと誰が保証し得ようか。しかしながら日本に一人のかかる者の存する限り日本は文字通り永遠に汚されたる亡国の歴史をとどむるのである。その汚辱の跡は民族の存続と滅亡とにかかわらずとどめられるのである。

わが同志諸君は、この私の心持ちと同じ心を持たるであろう。再び生きることが希望せぬ、それは神のみの知り、神のみの決定し給うところである。

(昭和十九年七月九日 記)

第八講 三度「學術維新」を読む友等に

成就するとは、すべて祖先の体験を補足、完了することである。それは継承することである。継承するこ

とは信順することである。親鸞が宗教の本質を信におき、聖徳太子が「是の如くとは信順の理辞なり。信ずれば則ち言ふ所の理に順ぜり。順ずれば則ち師資の道成ず。経に豊と約となく、信に非らざれば伝へず。故に建（ハジメ）に是の如くと言ふなり」と仰せられたるとき、眞実の理想実現の方途を示されたものに外ならない。

我等の思想上の先輩たる原理日本社の先輩達がいま、この最非常のときに悉く隠遁してしまわれることは遺憾の上もないことで、これは我々自身の思想を反省する上にも考えねばならぬ深刻、重大の問題であるが、しかし個人に完成を求めることは永久に出来ぬのである。原理日本社の先生方も凡夫たることにおいては変りはない。先生方があれ丈の志を抱き、あれ丈の活動をされながら、最後の所で蹉跎されたことは、我々にとつても一層悲しむべく、嘆くべきことであつて、我等の重大任務はそれを成就することにある。

楠公の戦死と藤原藤房の隠遁とを同じ心理的動機に出ずるものと井上右近氏は言はれたが、この議論が正しかつたか否かは客観的に評定せらるゝ、よりも、むしろ楠公の、また藤原公の心を偲び、その心を悲しみ、その心を一つのものとして慕おうとする心もちに重要性があるのであつて、その心持はすべて理想実現の根基である。

蓑田先生は精神錯乱せられた。それについては、先生の精神生活の欠陥を追求するより一層遙かに重要なことは、脳漿をしぼりつくして倒れられたことを思うべきであつて、それを思うものにとつては先生の精神錯乱は戦死にも比せられるのである。先生は矢つき刀折れて倒れられたと言つても過言ではない。先生はもとより思い上がつておられた。戦争初期の赫赫たる戦勝を日本国力の實質的發揮と見誤つておられた。そして、戦争の次第に不利に傾きゆくのに對して、全身から自分の信念の崩折れてゆくのを感ぜられた。それが錯乱の原因であつた。力の既に涸渇するとき、そこに現われた客観的勝利の情勢は空虚の高揚に、また敗退は決定的没落に先生の精神生活を導いたのであつた。しかし、この時に耐えるべく先生の精神が強靱でなかつたにしても、それは先生の罪というよりも人間の罪であり、また時代の罪である。むしろ自己一身を、その物質生活のみでなくその精神生活までも犠牲に捧げられた先生のご努力、またそのお志、ご生涯という

ものを悲痛の思いをもって憶念しなくてはならぬ。先生はあらゆる時代にぬけぬけと生きようとすする明哲保身の術を知られなかつたからこそかく錯乱されたのであった。先生はもう錯乱に至る前よりして自分の時代に対する使命とか、自分の時代における存在意義とかいうようなものを些かでも考えぬようになっておられた。それは不随意的(先生の用語によれば)ではあるが、先生が思想戦において戦死されたことを意味するものだ。かくの如く一切を捧げつくす精神によって國は護られる。何よりも大切なことは後より来るものが先に行くものを憶念することである。そこにはあらゆる矛盾がそれながらに宇宙の調和に導かれるのだ。

「是の如くとは信順の理辞なり。信ずれば則ち言ふ所の理に順ぜり」——この御言葉は永久に渝るなき人生の法則である。それ故、先生の思想にあるところの欠陥を知るといふことは必要であるが第二義的問題である。そうして、根本問題はそれとは比較にならぬ重要性をもつ。先生は我々のことを批判せられて同志に非ずと宣説された。先生の心証においては我々は先生の批判の対象であつたかも知れない。しかし、同じ志より出てその方法を異にしたということが直ちに相容れざるものとなることは絶対にはないのである。先生の思想と我々の精神と、真合一するものであることは我々の信念であり、現代史は最も近き将来においてそれを証明するであらう。成就せざる故に個人に対する哀憐と同情は起るのである。哀憐と同情と、それは連続不斷に人生を成就して行くのである故に。

三井先生、松田先生の隠遁も我等はそう解したい。

あゝ、人生において最も尊きもの、最も力あるものは永遠に連なる憶念の力である。成就せらるるものは人生の志であり、念願であり、成就せらるる場所は民族永遠の生命のうちにある。

「世界観と哲学」

「哲学はそれが自然、人生の総合的全関連を統一把握して個別科学の研究方法を認識論的に吟味、嚮導し、研究成果を世界観に体系化して実人生の究極目的に正しく貢献せむ事を任務とするものであるから、それが専門研究でないといふ所に本来の学的性質があるのに、ドイツ哲学は個別科学と対立する事実無視の専門哲

哲学は學問の學問である。あらゆる認識を統一的に体系化するとき、ここに、これらの認識はその全体的関連において正しきを得るに至る。即ち、自然を認識せんとして得たる結果を直ちに人生にあてはめんとすればそこに誤りを生ずるに至るのである。また、生物学の研究に物理学の知識を全的に適用することはできない。それは、限られた経験、認識を他の知られざる部分に適用せんとする場合には必ず更に根本的な検討を要するということであるが、次第に人類の諸問題(宇宙、人生における)に対する知識が累積せらるゝとともに各別の問題に対する知識は整理、体系化せられて、ここに各種の學問(科学)が生ずるのであって、この一定のものを研究対象とし研究の範囲を選択し、限局することによって生じた各科学の間には各別の方法がある。

宇宙、人生のことは凡て関連があるのであるが、その中からして一定の現象を選び出して研究することによって、ここに一定現象、固有の法則を発見することが可能になってくる。この一定現象、例えば物質の体系としての諸現象を選び出すとき、ここに物理学が成立し、またその中で電氣的現象を選び出すとき、ここに電氣學が成立する。この一定現象を選出するには一定の方法を必要とする。それが學問の研究方法である。研究とは先ず研究対象を選び出すことであるが、その研究対象を確定することができれば、その時、その研究はすでに半ば完成せられたと見らるゝので、それは特定の対象を他から識別する事が非常に困難であるということの意味している。そこで自然科学においては、実験においてもそれぞれの研究によって特殊の装置を必要とし、また一定の目標のもとにこの結果を整理する自然科学においては、この実験がその方法論上重要な問題となってくる。精神科学においては専ら一定の見地をたてる事が研究対象選択の方法論上の重要問題で、しかし(この間不明)、自然科学においても実験の方法を立てる基礎的前提である。

そこで見地と方法ということは結局同じ問題となってくる。ところが見地というのは一定の見地があつて、それは他の見地が存することを前提としているのであるから、もとより全体的・究極的のものではないわけである。しかし人間はこの全一的究極というものを求める。それは人として生きて行く為にはどうしても部

分的見地に依頼することが出来なくなるからである。そこで全体的見地というものが仮にあったとしたら、部分的のそれは、その全一的見地にあつてどういふ風に扱われるかということが重要問題になつてくる。これが哲学の問題である。そうして、もしここに部分的見地が総合されて、それが全的見地の羽翼となり得たならば、それは即ち世界観である。世界観とは世界認識の問題である。もとより世界認識ということが固定した知識のものに止まるならば、それは世界像であつて世界観ではない。この点に重要な問題があるがそれは次第に論じよう。

見地を立てるといふことを総合的態度について言つたものは立志といふことである。山鹿素行は学問の第一歩は立志にあると言つたが、これは総合的なる確固たる見地、研究方法なくしては学問は出来ないといふ意味である。また、親鸞は「難信金剛の信樂は疑を除き悟を得しめる真理なり」と言つた。「難信金剛の信樂」といふのが親鸞の人生に対する根本見地であつた。それは難信であつた。そうして信を重しとして教をむしる第二義的にみたのは外国の宗教に対して、また宗教一般、人生一般に対する普遍的見地を要求せられていたからである。

そこで前に返つて、見地を立てることが即ち学問の方法を見いだすことになるのであるが、一定の見地を立てるといふことは対象の認識に關して主觀の心理作用を一定の限度に限定することである。ものを認識する場合にはあらゆる立場や方法から全的に把握することが正しいが、しかし先ず一定の限度をおいてその立場から認識し、また他の立場からするという風にすることによつて全的把握は一層全きを期することが出来る。何となれば、只漠然と全的認識といふことになる、ぼんやりとしてしまつた対象を把握することが出来ぬか、または結局いろいろの立場に瞬間、瞬間に移り変わつて、しっかりした見地を確立することが出来ぬことになつてしまふ。そこで、総合的認識とは結局主觀の精神作用の限極的活動によつて得らるゝものであるから、結局は全一的把握に総合されねばならぬ。しかもそれは、各見地の認識が正しく、その關係を乱さずに統一されねばならぬから、それは体系化せらるゝことを必要とする。しかしその体系化は各々の見地そのものの検討が行なわれなくては實現出来ない。つまり、その見地を可能ならしめる精神作用、意識作用

の限定ということ、そのことがどの程度に、また如何にして可能であるかを検討される必要がある。例えば、生物学ということになると、それは動物や植物を美学の対象としてではなく一つの物体をもった生命として、即ち生体として研究するという見地を立てる場合に学問的に可能となるのであるが、元來精神活動は全一的のものであって、之れを分かつことは出来ぬ。分かつと考えるのは仮定である。だからして、それがどの程度に、また如何にして可能であるかが検討されねばならぬ。ここに各研究の見地の検討が必要であるばかりではなく、諸知識の体系としての各科学の学的性質の検討が行なわれねばならぬ意味がはっきりしてくる。そういう検討が行なわれた場合にのみ、その知識は正しいものとなって来るのである。認識論の任務はここにあるのであって、哲学は諸科学の知識の正確を保証するものである。上記引用に「個別科学の研究方法を認識論的に吟味、嚮導し」とあるのはこの意味である。

ここに成立した全知識体系が世界観であるが、もとよりこの知識は固定したものではない。それは不斷にその成立の根底よりして吟味せられつ、成立するものでなければならぬことは当然である。世界は全一的に把握せられねばならぬ。知識体系はそれを分析したときに表れるものであって、世界観は全一的の全活動による世界の直観である。かくしてそれは言証不利、拈華微笑的のものである。それは不斷の心がまえ、精神的態度というべきものであって、それが旺盛であり、活発である場合に始めて諸々の知識が正当に保証せられるので、素行が学者に「英雄豪傑の士出でざるに及んで学問が衰えた」と言ったのはこの間の消息を言ったものに外ならない。

「学者に英雄豪傑出でず」ということは単に氣力の盛んなものが出ないということのみを意味するものではない。人生的活動をするもの、即ち国士的な人物が出なくなったということ、それはあまりに学者じみた学者のみ出たということであり、また学問をした人が政治的興味や情熱を失ったことであり、政治家や一般実務家が学問をしなくなったことである。

学生運動はかようなところより深思せらるべきである。現今の大東亞戦争の敗退は決して一時的な現象、または一、二政治家が事を誤ったというような容易に変更の可能な事態ではなく、実に数十年にわたる学問

の誤謬、無哲学、無人生観から生来せられたものであって、学者に英雄豪傑の士出でざりしのみならず英雄豪傑そのものがなくなつて久しいのである。英雄豪傑の士は簡單の、また偶然の産物ではない。それは、青年時代より国家のことを深く憂い、自ら身をそのために捧ぐべき決意のもとに東奔西走する生涯によつて生み出されるのである。学生時代に国事に奔走してはならぬというような方針（文部省は學生運動弾圧に關してその態度を明らかにした）そのものが亡国的なものである。かかるものを打破せざる限り国家生命の本源でその生成を阻まれておるのであるから、また戦争の敗退はその深田より由来したのであるから、今日の国難を思う学生は何よりもかかる現状を打破すべく決意せねばならぬ。学生は今日のごとき場合、国事に奔走せずして何の学問をなし得るのであるか。

学問の学問—哲学は英傑の学問であるが、この学問の学問を為さんとする人は戦争の現状と将来を思い、その深田を思い、真に勝つべき道を確認すべく努力すべきである。学生諸君は年令は若いのであるが、しかし選ばれたる青年である。その中にかくの如き俊傑の士がいないと誰が断言し得よう。否、国難の時代は常に英傑をつくる。英傑の任務は英傑を發見することである。そうして心を共にし志を等しくして共に国難に邁進することである。学校より命令せられたる故を以て、またその範圍に於いて国家に尽くさんとする勤勞動員の如きは亡国的現象と言わねばならぬ。英傑とは己が心を以て思索し行動する人の謂である。哲学も宗教も大切のことは自らの体験に立脚して研究し、信樂を發することであつて、かかる人がいなくなつたことは憂うべき事態である。

学生が社会的地位に於いて独立しておらぬとしても、それは思索、研究するための有利の条件を確保するために世の中の雜務から遠ざかるために与えられたる特殊の半面であつて、ここにこの半面が重視せらるゝに至つたのは学問内容の貧弱、学問研究態度の謬りに原因している。学生諸君が一度志を立てて国家のことを以て自らの任とし、国士を以て自ら行動し、重要な問題には必ず重要な發言をなし、学問的正確を以て説得し、その主張を貫徹し、且つその氣風を一世の潮流となすに至つては、も早学生は一個の堂々たる志士であり、英傑であつて、従來の学生に対する認識が忽ち払拭せらるゝに至るのである。我が志を共にする諸君

に念ずることは、自己の志を堅確に保ち、その言行を苟もせず、また他の一言のために容易に動ずることなく、深くはかり遠く慮ってしかも断固として事に処するの士とならんことである。今日の日本に正しき学をする条件を与えられている者は極めて稀である。或いは、大學の教授連の教えを受け、ジャーナリズムの影響に染まり、流行思想のために自らの魂を傷つけ汚したるもの、滔々たる風潮である中に於いて、幸いにして正しき総合的学問をすることを得る幸慶を思い、使命の重大を痛感せねばならぬ。諸兄は友等と心から語らう事なき一日を憾みとせよ。聖賢の書を心力を尽くして読まざる一日を憾みとせよ。

「イエス、悲しみまさり、いよいよ切に祈りたまへば、汗は地上に落つる血の如し。」(ルカ伝)と記されたるごとき熱禱なき日を憾みとせよ。草木を動かす、もの言わぬ自然を語らしむるごとき詩の生まれ出でざる一日を憾みとせよ。新しき友等を見いだし得ざりし一日を憾みとせよ。かくして、諸兄の全身を挙しての努力の合成するところに生成する国家生命の神話的発動、そこに関与する我等の輝かしき生、それを思い、一刻の空しき時なき、悔いなき生を實現せられんことを私は諸兄に祈る。諸兄の生がさながらに国家の生命に連なるときのことをおもっても(2字不明)ありの一事を日毎におもわるべきである。

昭和十九年七月十六日

— 昭和二十年十一月二十六日写記 —

第九講 日本に西洋のような哲学がなかったということ

日本には西洋におけるごとき哲学がなかったということは、重大意義が反省されねばならぬ。それは日本精神史の誇りであるとともに日本歴史の勝利でもある。

西洋哲学の起源はギリシアに遡るが、ギリシアも他の民族と少しも異なることなくその固有の神話があつ

た。それが東洋の強大国に接して、ことにその武力に圧せられて、その固有の神話に反省が加えられるに至った。それがギリシア哲学の起源であるといわれている。それ故、その哲学はギリシア本土に起こらずしてその小亜細亞における植民地で起こった理由が説明せらるゝのである。東洋の哲学は支那及び印度にその起源があるが、支那の上代哲学は実践哲学であつて形而上学ではない。むしろ印度哲学が本来的な哲学である。これは外国民族に対する脅威に対する自国民族の神話の反省といふことからではなく自国民族の説明の爲に起こつたのである。それ故、ギリシア哲学より系統を引く西洋哲学がはじめから個人主義的理知主義、合理主義的傾向をもつており神話に対する反抗の精神に充ちておるのに、東洋の哲学は、例えば仏教における曼陀羅の思想に伺えるような、宇宙の調和的説明をその主傾向としてゐる。しかしながら、ギリシア哲学が神話に対する懐疑から始まつたことを意味し、それはギリシア精神そのもの、体験した史的生活の破綻を暗示するものであるのと同様に、印度哲学が神話に対する説明から起こつたことが、生活の安穩とそれから結果せしめられる思索の夥多を意味した一種の生活の危機を暗示するものであつた。一つは外部からの危機に崩れた精神の産物であり、一つは内容よりの危機そのもの、表出であつた。支那の実践哲学も同様、周末の国家的衰退期にあらわれた政治道德思想体系であつて、それが遂に支那民族の完全なる統一を導き得なかつたことが思い合はされねばならぬ。これに反して日本には神話があつたが哲学はなかつた。日本は、ギリシアのようにたしかに強大な大陸国の侵寇を身近に感じたが一つは日本の天險がこれを近づけなかつたし、さらに本質的問題としては日本の統一的精神が自国の神話に対する批判の生ずる余地を余さなかつた。日本が武の國であることも重大な意義があることである。

聖徳太子は「日出処天子、書を日没国天子に致す」と仰せられ「東天皇敬白西皇帝」と宣せられたことは正しくその積極的統一精神の現われであつた。太子は仏教哲学を摂取せられ御自釈をも残されたが、それは大陸の経疏とは非常に異なつた概念打破の哲学であり、そのご表現には眞の意味の文学的価値を備えさせられてあつたから仏教哲学というものが日本での流行とはならず、却つて万葉時代が大陸文化摂取の効果として現出したのであつた。太子の仏教摂取にはもう一つ国民教化の問題が重要な課題であつた。それは多分

に政治的なる意味があるのであって、従つて仏教は一つの極めて重要ではあるが、しかしながら飽くまでも手段に終わるものであった。聖武天皇が三宝の奴と仰せられながらも、しかも仏教を国民教化のために十二分に活用遊ばされたことをおもいまつるべきである。もし文字通り三宝の奴であらせられたならば国分寺建設を中心として国民教化の大事業は生まれなかつたであらうし、第一万葉集に仰せられるごとき雄大の御製は生まるべくもなかつたのである。かようにして、日本は神武天皇の大御代以来政治的にも文化的にも幾多の大きな危機に際会したが、古事記がそれを示し万葉がそれを継ぎ太平記が更に継承しておるように、つねに全精神の表現はとやうことである。この全精神の表現は帰依の対象が確立しておつたから可能であつたのである。そこに乗托する自由、無碍の活動こそ、芸術的表現の根底であるから。

例えば、ここにフィヒテの「独逸国民に告ぐ」の一卷を取つて考えて見よう。フィヒテは何よりも自國を征服したるフランスの精神を自國の精神と比較した。彼の結論は、その民族の言葉に昔ながらの純粹性を保つていないフランスはその純粹性を保持しているドイツに結局は敗れざるを得ないと言ふことであつた。この両民族の精神をその言語によつて比較した。(フィヒテはさらに他の根柢からも比較しておるが) フィヒテはその正しい哲學者としての使命を果たさんとしたものであつた。何となれば、ギリシアの哲學者が自國の神話(神話は太古の哲學者でもある)と他國の神話との比較より生じた疑惑を根源としておることにも知られるように、また印度哲學者が自國民の生活の安穩から生ずる弛緩と分散の危機を一つの大いなる衝動によつて全體的に精神を振起することによつて打開することが不可能であつた爲に、生活の末端をも説明し規定せんとする煩瑣哲學によつて救おうとしたように、外國の精神と自國の精神を比較しつゝ、そこに自國の國民生活に対する説明を与えんとすることは哲學の本來的使命であり、それをフィヒテは新時代の内容と形式とを以て行なつたと言ふことが出来る。フィヒテのこの講演は多くのドイツ知識人に感化を及ぼし、それは國家の危機にあつたつて常に回顧せられたものであつた。ヴントの「諸國民とその哲學」はその精神を継承し、それを

二十世紀の内容と形式に於いて実現しようとしたものである。このフイヒテの「独逸国民に告ぐ」はドイツ民族がフランス民族に優越するという保証を与えたものであったから、それはドイツ国民に勇氣を与え普仏戦争の勝利をも導いた一つの原因をなしたものであったけれども、もとよりこの哲学書が直ちに國民をフランス撃退に導き得たものではなく、それは程経てからのことであつたし、また普仏戦争の勝利は直接的には軍人や政治家——モルトケやビスマルクの功に帰せらるべきものである。ヴントの「諸國民とその哲学」がその題名にもか、わらず英国精神の批判であるけれども、かゝるもの、存在が如何ともし得ざりしものが前大戦のドイツの英国による撃破であつたのである。要するに思弁するということは生活の整合のために、平常の用意としてはその価値はもとより高く評価せらるべきであるけれども、それは飽くまで用意であることを認識せねば人生の大きな錯誤に陥るのである。それ故、戦争にあつて哲学の研究をするということは、ある特定の人々はもとより専心せらるべきであり、それは戦争そのもの、遂行の上に役立てらるべきものであるけれども、それは宗教的礼拝、芸術的表現によつて支持せられぬ限り全く無意味なものとして終わることを知るべきである。何となれば、精神の全一的活動は忘我の思いであり、その集中せられたときは宗教的礼拝となり放射せらるゝ時は芸術的表現となるからである。そうして精神の価値はかゝるもの、内容によつてのみ評定せらるゝのである。

そこで、色々問題はありますが端的に言おう。根本的問題は大東亞戦争で日本は勝つ、また勝たねばならぬと言ふことだ。

何故に勝つか、日本に於いては哲学的思弁は常に副次的役割を果たすに止まつて、礼拝と芸術的表現と政治的実行が支配してきた。この精神的統一力が事ある毎に常に發揮せられて来た。それは他國の精神と比較して本質的に勝れたものであつた。それ故に勝利は比較精神史がこれを証明するのである。

しかし、比較精神史は比較精神史であつてそれ以上のものではない。そこに得られた結果に依頼すること、日本では常に分析反省に依存しようと思せず、それを不斷に統一しようという不可抗の精神本来の衝動に身を

任せてきた。いまもその伝統に随うことが我々の義務である。

精神を統一するということは祈念をこめるということである。その祈念が持続的に一つの方向に集中せられる為には礼拝の対象が決定されねばならぬ。その対象は個人が随意に選択したものではなく個人の精神がそこより生まれ出る所の本源でなければならぬ。我々が国家の祖先神靈、また現人神を礼拝しまつるのはこの正しい礼拝の対象を持つものである。しかしながら、この祈念をこめる精神の統一は生ける人にとっては大歓喜であつてそれは自然に溢れ出る生命の感激である。それは芸術的表現となるのである。我等がシキシマノミチを修めるのは正しき精神の要求に随うものである。この二つのことが何よりも我々に今要求せらるゝ、精神的生活の義務である。これが思弁の必要なる分析の結果を余すなく活用して一つの実行に集中する力となるのである。

戦争は、今日は物質の多大の力と技術を必要とする。それを十二分に活用するためには緻密の思弁を必要とする。しかしその分析、思弁せられた結果はまだ一つの用意であつて直ちに戦力そのものではない。戦力はそれを統一的に活用することによつてはじめて發揮せられる。それは固定的に数字に表れるものではなく、不断の配慮の持続である。思弁の結果を不断に活用し得る精神力そのものである。それは消長があり呼吸があるが、しかしながらその統一力は精神的伝統の法則に基づいて礼拝と芸術的表現の内容によつて決定せられる。今日必要とせらるゝものはもとより思弁であつて単なる増産目的の実行でないこと言うまでもないが、それを実行に導くためには単なる思弁以外のものが必要であることを考えねばならない。そうして、民族生活そのものに向けられた思弁ということが必要であるとするならば——それが即ち哲学なのであるが——それはかゝる思弁というものを副次的としてきた日本精神史の伝統とその価値とを中外に明らかにし、大東亜戦争終局的勝利を証明するとともにかかる精神史の伝統の發揚と鼓舞激励をする力あるものでなければならぬ。かゝることを成就することが今日学者の使命である。日本の哲学者は日本に哲学がなかりしことの意義を闡明するのがその任務である。それは大東亜戦争の最大危機にあつて依然として行なわれている哲学的思惟——それは哲学者によつて行なわれているのみではない。學者、教育者、政治家等すべてに行なわれている俗論

である——を唯一の生命的統一に導く任務である。それが世界観の問題である。

(昭和十八年七月記日不明)

第十講 学生運動をいかに展開すべきか

学生運動を如何に展開すべきかの具体的計画については十分議を練って考えねばならぬ問題であるが、ここに覚え書き的に順序もなく記しておく。

1、現状と最も近き将来の計画

日本学生協会が精神科学研究所と共に実質的につぶれてから(不明)来なかった。一つは学生諸君の大部分が軍隊に入った事である。しかし今一つは原理日本社の理由もあって事件そのものについて色々反省し、学生諸君を直ちに運動に参加せしめるについては不自然の点があった。三つには諸君が自然に自分等のやって来たことを顧み、日本の大東亜戦争の現状と将来を見且つ考えて、自ら立ち上がるのを待とうとした。その中であって足立原兄は希有の存在である。尤も同君は学生運動に直接携わらなかったこともあるが、諸君に先駆けての運動は称揚せねばならぬのである。いま、高等師範学校に十二、三名の同志があるが、文四二年と文一三年とが近く全クラスが同信結合を実現せんとしているという。足立原君が木野君を連れて来たのが昨年の暮れ近くであったと思うが、家で御集研究の講義を始めたのがこの四月であったと思う。その頃の諸君を今日に比べると今日は格段の進歩である。人数も倍加せられている。テンポは幾何級数的に速められている。気運というものは予定、予測を越えて激成せられるものである。今はこれらの十二、三名の諸君が単に予の講義を聞くという二か月前の態度とは全く異なつて既に一つの重要な運動を開始せんとしている。

しかし、学問的实力は向上したであろうか。諸君は相当の勉強をしているようである。一昨日、「學術維新」

を読み合せたが、大体正確に読んで、句、結なども正しく読む、しかも相当早く読むということは学力がなくては出来ることではない。引用文等も誤りなく読んだ。尤も「學術維新」は通俗的であるから「御集研究」のように難解ではない。従つて質問もあまりなく、またこちらの質問に対しても大体正しく応答することが出来たのだと思う。「學術維新」をよく読みこなすことを勧めておく。そうすれば、観念論、唯物史観等に対する理解も一通り出来るしまた相当に活発な思惟能力もえられるから手ごろの本である。これを七月中に一通り読み上げて更に精密に検討してほしい。「學術維新」は学生運動をやる学生諸君の虎の巻である。必携である。しかしあれに吞まれてはならぬから読む心得が大切である。そのことについては記して渡した。あれを読み上げたらもう一度「御集研究」を読み、また黒上先生のご本、それから原理日本社発行の大体全書物を読んでもらいたい。殊に計画経済に対する批判はしっかりやり、確固たる時代認識を持つように希望する。やがて現代史的研究を分担してやってもらいたいと思つてゐるが、それについては國家總動員法、満州事変以後の外交関係、昭和初年以來の赤化運動、明治、大正思想史等を相当専門的に、また専門家について研究する必要がある。また、特殊の、しかし重要な研究は支那事変以後の政策に関する精密な検討で、これには戦争の将来に対する政策の立案も含まれる。そして、この特殊研究は國家的意義を持つてゐるのである。即ち、これ等の研究は直接現代の修正に役立つものであるから研究するということがこの修正を志す人々を動かすこととなるばかりでなく、従来志を持つてゐた政治部面の人々は限られた問題の研究しかしておらぬから、我ら同志はこの有志の活動を相互に結合し有力化する役割をおわしめられ且つそれを容易に實現することになるから、直ちに政治的に非常に重要性を持つてゐることになる。学生諸君がこの重要な政治活動に参加する日も数か月後のことであろう。大分叙述が目的分化したが、学生諸君の勉強はこの当面の政治的に重要な問題とともにやはり古今の古典に習熟しなくてはならぬ。これはしかしその折々に体験的に読めばよろしい。今欠けておることは歌の創作、鑑賞の勉強である。これも余り専門的にやることは宜しくない。しかし、自然に溢れるようにやつていきたい。殊に「御集」拜誦は嚴修してもらいたい。

高等師範で八月中に数人の確固とした同志を結合することを希望する。これは皆で手分けすれば可能のこと

である。殊に一年生には数十人の同志を容易に得ることができようし、最早気運は出来ておるのであるからその勢いに乗ずれば何事も出来ないことがあるか。その勢いは往年の学生運動のときと違ってもつと基礎ができておる。高等師範の数人を手分けして他の一高、その他の高校、早大、慶大等の私立大学、専門学校等にも、また陸士や海軍経理学校等にも同志を得ることが出来よう。諸君の中学、師範時代の同期生を求めれば相当あろうし、またその他にも方法は幾らでもある。八月中にこれを数十人得るように希望する。九月には一千人を数えるに至るであろう。しかもこれは往年の学生協会の運動とは一応無関係に出来る。これを見て学生協会の旧同志も黙ってはおるまい。

さて、ここに集まった学生諸君は如何なることをなすべきか。これも上に少しは触れたのであるが、同志を各方面の学生や青年の間に見いだすことが第一の要務である。そうして、それは只同志だというのでは勿論いけない。政党のようにその党に属する人を見いだし増加していくと云うのではなく、時代に対する検討を的確に行なうということとを不断になしつつ学問的研鑽をしなくてはならない。古典の読み合せは非常に大切なことでこれを続行するのが同志の集まりであるべきである。

次に、集まった同志は必ず現状改革の实际行动を協力して為すべきである。その時は十分政治的顧慮を以て行動せねばならぬが飽くまで学問的に正しい解決方を以て推してゆくべきで、ここに我等同志の行動の意味がある。この改革事業については、その問題を選択すべきであり、またその問題は相互に示されつつ各方面の改革と併行し進めて行くような配慮が必要である。

しかしながら、今日我々がやらねばならぬことは色々の問題ではない。ただ戦争を勝利に導くの一事である。しかしそれにも、分担して進められる改革の政治的、思想的行動が必要であることは言うまでもない。重要なことでも軍政の撤廃、計画経済の撤廃、言論指導方針の修正、戦争の敗退によって出てくる旧軟弱外交及びこれに連なる人々の誤れる国体観、政治論を正導しつつ今日の政策修正に役立たしむること、マルキストの策動の密封、国民士気高揚の具体的方策実現等がある。それについてどうしても分担して協力せねばならぬ。まず学生諸君が少壮軍人の間に同志を見いだすことは軍人の反省に役立つこと多大のものがあろう。また、例えば

勤労働員に対する修正を要求することが現在の政治指導者の反省を促すことに大きな効果があることも勿論である。これらの問題については、それぞれ専門的に研究している人があるがそれらは他の問題との関係を知らぬから他の問題の正しい研究者との協力が出来ておられない。それでそれを実現するのは我々の使命である。そしてそれらの有志の人々は勇氣を持っておらぬ。それは多くの支持する力ある同志を持っておらぬからである。その同志が我等の学生の同志に見いだされるとすれば必ず勇氣を持って所信に邁進することとなる。そのように諸兄の活動は非常に重要な意味を持っておる。そうして、これらの活動が進められることによって事態は次第に改善されるであろうが、諸兄が常に用意しておかねばならぬのは非常の場合の決死的行動である。政府がアメリカに屈伏せんとする時、また赤化政策をもって本格的に日本をソ連化しようとする時等は学生の團結力によって蹶起せねばならぬ。そのためには古事記及び歴代御製、詔勅集を額にして天草の教徒のごとき、一向一揆のごとき勇猛の活動をせねばならぬ。研究所の者ももとより一致して奮起するのである。

しかし、最も近き将来、即ち八月中には百数十名の同志の結成、九月には一千名のそれと、二、三の問題についての実行運動の開始である。その問題については諸兄の選抜に任せらるべきであるが、もとよりそれは十分連絡、検討せしめられねばならぬ。

2、さらに少しく将来に関する計画

十月には諸兄は、學生の方は新しい同志の活動に任せて、しかしながら幹部としての地位はあくまで確保しつつ青年将校、官吏、工員等の間に重要な同志を結成しなければならぬ。

この頃の諸兄の活動は狂瀾怒濤のごとき勢いを以て進められねばならぬ。当局の如何なる強圧も潜り抜けてまた不可能となるほどに強化せられねばならぬ。そうして、青年層の間に戦争をここに導いた人々に対する責任追求の要求が熾烈化するようにせねばならぬ。この頃戦争の情勢は愈最後の重大関頭に立つてであろう。そのとき、日本の朝野は如何なる様相を呈するであろうか。

まず戦争を終息せしめんとして米英に屈伏せんとする策動が勢いを呈して来るであろう。例えば、幣原喜重

郎などを総理大臣とする運動が現にもうあるということであるし、そうでなくとも色々の策動が起こってくるであろう。上流階級がこれには相当に加担するであろう。その時、この人々は国民の心理を無視して行動するに至るであろうのみならず日本国体についても形式的に考えて、皇室さえ存続すればいいではないかという風に宣伝するであろうし、それに自分等の利益の擁護ということを考えて国威の失墜、日本国民の信念の喪失、国民生活の困難などは度外視した行動を取る危険性が多分にある。至尊が屈辱的講和条約に調印遊ばされるごときを重大なる国体上の問題と考えずにワシントン、ロンドン条約当時に示した無感覚を何十倍かして殆ど己れの天下が再び来たというごとき気分で行動するに至るであろう。

これに対して、ソ連の協力を仰がんとするものが一方非常な勢いを示して来るに相違ない。この人々は要するにソ連に対する買い被りから発するのであるが、ソ連がそれ程力あるものであると見るのは根本的の誤りである。ソ連はその宣伝で米国という一儲け熱に浮かされている国を釣っているにすぎぬ。だから、それを信頼して事を行なおうとすることは余り目当てのあることではない。もとよりソ連に哀願すればどういふ結果になるかと言えば国内の赤化は必至である。今日既に相当にこの方が進んでいる、というのは樺太讓渡説などによって見られるが、龐大な資源を持っている国に対して猫額にも当たらぬ樺太南半を讓渡してみたところ何にもならぬことは明瞭である。もし、東條がこれについて幾分でも着手しておるとすれば、戦局の悪化とともに東條が、かつてルーデンドルフが行なったように、共産党への政府讓渡ということが必至のことになってくるであろう。政治的にソ連を利用しようとするものとともにソ連と同じようなことをやらねば生産が拡充せぬし、また戦争が出来ないと考えておるものが今日相当に軍人、官吏の中におるのであるから、これが勢いを得て来ることも必至である。おそらく、この外交、内政両方面からして日本のソ連化は戦局悪化とともに進むであろう。そうして、それに対立する米英派との抗争により日本内部の相剋は大東亞戦争前より遙かに深刻化するものと見られる。その時、皇室に近いものは米英派となりそれが勝手の行動をとるに至れば、国体の上にもこの政治的抗争が重大の危険性をともなって現われてくると考えられる。国民はこれを傍観することとなるが、殊にインテリ層の傍観的態度が如何に重大の結果をもたらすかを考えておかねばならぬ。それは、彼等が熱中

することの出来ない個人主義的傾向をもっておることから推測せらるる。しかしそれは、事態を愈悪化し一部野心家の乗ずる隙を益々与えることとなる。これに対して、マルキストや日本主義の浪人等が次第に動き始めるであろうが、後者の大部分は前者の頤使に応ずるものとなっておる。それは、これ等の人々に全く批判的能力を欠いておるからである。この連中の策動がいよいよ混乱を増大し、それを抑える能力が官憲のなかに涸渇するときは、即ち官憲の中にもまた本当の批判力が今はなくなっておるのであるからしていよいよここに混乱は收拾のつかぬものとなつて行くであろう。二・二六事件の記憶は、軍人に上官の命に必ずしも服せずの気分を与えておるので、その上軍人は考えが単純であり、またその考えを直ちに実行せんとする性急な傾向があるからして、輕挙妄動はいよいよの場合軍人の中から行なわれるであろう。こういう風にかんがえてくると、今後の国内情勢の動乱は測るべからざるものである。本年十、十一月頃より必ずかかる兆候が現われてくるものと思う。学生運動は青年将校及び警察関係司法部と結合せねばならぬ。学生運動の闘士の一部は赤化強圧警察の一部に編入せられる必要も生ずるかも知れない。

ともかく、かような場合を予想して十分備えを固めねばならぬのである。この両勢力の間に立つて、一方では両派をおさえて各々忠誠を致さしめ、且つ次第に日本国民として協力せしむるよう努力するとともに、一方では所謂無為の中立派に感情と意志とを与えて奮起せしめ、ともに全国的協力を實現するよう誘導せねばならない。これらの難事業は維新の当時よりは遙かに深刻なもので、しかもそれが結局学生運動を動力とする青年知識層の活動によらねば實現せられぬことを思うたならば、学生諸君は真に奮起するところがなければならぬ。我等は日本が滅びてよいかと日夜自ら問わねばならぬ。滅ぶべからざるならば、これ位のことを我等がやり得ぬということがあろうかと日毎に思うべきである。学生諸君は多くの経験を積み蓄めねばと思うかも知れぬ。しかし、経験は年月の多寡によるものではなく、青年にして多大の経験が得られぬということは断じてないのである。諸兄は年令の一つをも加えぬ内に重大危機に遭うことを思わねばならぬ。その用意は今日からでも決して出来ぬことはない。諸兄一人一人、己れ一人に重大使命がかかっていることを痛感すべきである。他の友がやらねば自分一人でもこの難事業をやつて行こうという決意が必要である。諸兄は日本歴史に直ちに

つながる英雄とならねばならぬ。諸兄が一度志を決してこの実行に蹶起し、その一路に生を賭して邁進したならば諸兄は直ちに古今の英傑の列に加わることとなる。日本の将来は文字通り諸兄の肩にかかっておるのだ。私は諸兄のために道を拓こう。

(昭和十九年七月十七日記)

第十一講 新しき指導者

新しき指導者たらんと志す者はこの時代を無底の空虚から救うべく、詩と哲学とを創造せんとする。彼等は無限の宇宙を憧憬し、宇宙と共に無窮なる日本国体に帰依し、その心のゆくへも知らず永遠の生命を慕うてさ迷う生の創造威力により、思惟の明確なる法律、規律を定立して、離るゝ、それでもなく不断に繋がりにて生きる国民生活を調整、進展せしめんとする。彼等は、予め思惟内容を限定し、それを曖昧なる構成に築造してかえって全精神の進行を混迷と荒廢とに陥れんとする在来の学問に抗して、思惟を無限の自然に解放し、詩的表現の自由に遊戯しつつ、しかしながら、進行する精神の過程を全宇宙への正しき関係に分析、規正して秩序ある創造をこゝに展開しようとする。具体的に言うならば、彼等は詩と哲学の運動を押し進めるのであった。

天皇に直屬し奉る国民の歡喜は詩と哲学の再生によつてのみ可能だ。

〈記日不明〉

(昭和十九年七月?)

第十二講　　マタイ伝私講

今日我々はマタイ伝を読んで如何に多くの教えを受けることであろう。十数年前に読み、数年前に読んだ時と比べて我々の理解は本質的に深化せしめられたであろう。それは繰り返し読みだと言うこととは無関係である。我々は今マタイ伝の解釈を時代から得る。キリストを生んだのが民族とその時代とであったごとくキリストを理解せしむるものはまた我々の民族と時代である。それは如何なる力にもまして偉大なる人生の力であり、人の精神と生涯とに決定的影響を与えるものはこの力である故に、キリスト教が西洋思想に与えた影響が結局はキリスト教を生んだ民族と時代とであったこと、そうして西洋史の千九百余年間は遂にキリストの精神を理解せしむる基礎を与える程の深刻な時代が何れの民族にもなかったこと、そうして今や東洋の日本においてかかる時代が来たことを思いつつこのマタイ伝私講の筆をとる。何よりも、キリストが出たのはユダヤ民族が存亡の岐路に立った時であった。日本は今その時である。

論語と同じくマタイ伝もキリストによって著述された書物ではない。それはキリストによってその精神に激化を与えられた弟子の心に記憶せられたキリストの言葉である。それはキリスト自身の言葉ではなくキリストによって全人格的に動かされた弟子がその感激の心をもって不滅の記憶として不随意的に選択したキリストの言葉である。それは伝えられたる言葉である。それ故そこには二重の内容がある。二重の内容とは語りたる人と聴き且つ信じたる人との精神的交流の世界である。これこそはキリスト教の源泉であった。如何にキリストが弟子達に滅びざる精神的衝動を与えたか、弟子達は如何にキリストの言葉に信樂を覚えたか、最も時代を憂れうる人々のこの精神的世界の出来事を我々は見過ごしてはならぬのである。それは僅かにその一端をしか覗知し得ぬものであつて、伝えられたる言葉はこの精神世界の偉大なる出来事が包蔵されてい
ない。キリストはその唯一の頼みとする弟子達に語つたのである。漠然と一般読者に向かつて著述したのではない。理解力と関心とキリストに対する全身の愛情を欠いた一般民衆に語つたのではない。その弟子に語つたのである。民衆に語つた言葉もその弟子によって記憶に止められたのである。キリストはその瞬間の激情

に身をまかせた。それ故それは不滅の記憶として止められたのである。たとえキリストの言葉そのものを伝える点において些少の瑕疵があろうとも、活動せる人としてキリストの言葉はそこに止められたのである。それは不用意に語られた言葉である。それは衝動のままに溢れいでし言葉である。かかるものが生まれ、かかるものが伝えられた時代というものは深刻の時代である。それは生まれたということのみでも重要な意義があるが、それが伝えられたということとは生まれたということと同じ程度に重要なできごとであった。何となれば、それは深刻にして広大なる精神的共鳴世界の存在を報ずるからである。

キリストは何故著述しなかったか。当時の学者パリサイ人の他には書籍を読むものも少なかったであろうから、篤信なる下層階級の人との精神的協力によって祖国の危急を救わんとしたキリストが著述によってその精神を訴える対象は殆ど皆無であったということもあろう。著述を残せば探索激しい専制政治の強圧下に有力な証拠を残すことになって伝道に支障を来すことを恐れたこともあろう。しかし、一番本質的な理由はキリストがその全生命の衝動と作為せぬ示現の力とにその身を任せたことである。彼は何よりも生けるユダヤの国民と語ることにその全生涯をかけての使命を感じた。生きたる同胞と語るときにのみその生を実感した、その時にのみ彼の言葉には力がこもった。一般不特定の読者のごときに対して彼の感激は湧かなかつた。彼の言葉に対する直接の反応を知り得ない一般不特定の読者は彼の切迫した気持ちとは余りにもかけ離れたものと思われた。彼はそのようなものの中から若干の共鳴者を得ても到底それで急迫した祖国の現状を救い得るとは思えなかつた。それ故後世に知己を求めようと言うごとき弛緩せる精神は彼には全くなかつた。ただ憂念と悲哀とによってその生を（不明）せらるる国民の中に在ることをのみ欲して、殊にその思い切なる同志とともに常に離れず在ることを願った。かかる同志と国民との共鳴と共感によってのみ祖国の急は救われることと信じた。このキリストの真情は眞実痛切なものである。

著述は筆によってする動作が一定の時間を要することと視覚や聴覚に訴える表現を伴わないからして、その言葉を選択するために思考の回路を経ることによって論理的整齊に努力を費やすことになる故に情意の奔騰を制御する。著述を事とする者は突如として起こった事態に備える精神的用意を著しく欠如し直接的人格

的感化を与える力を失ってしまう。かくのごときものによつては遂に偉大なる精神的交流の世界を實現することは出来ない。キリストは筆をとらなかつた。音声を伴つた言葉によつてのみ語つた。それ故に彼の言葉には力があるのである。一度語られたる言葉はただ聴者の心に記憶せられ印象のみが消えざるものとして残るのみである。その言葉の一語一語は到底書籍のごとく確定的に止められるのではない。しかしながらそれ故に多くの言葉が忘却せらるる中であつて、直接の表情と特定の事情を、殊に聴者自身の生の変化に与えられた言葉の強烈な印象はあらゆる条件を含めて全体的に不滅のものとして生ける人の心の中に止められる。これこそ人生に止められたる最も生命的の、また最も永久的のものである。人の心に生きるかかる言葉は、その一語一語の綴絡は必ずしも原型を保ち得ないが、その代わり不断にその心の内奥より作用する力として人生の力そのものである。それは一つの理論の体系ではない。理論の体系は体系である限り、その全体を一瞬に把握し直接表現することは出来ない、従つて生の契機に全的に發揮せらるべき機能ではない、それは所謂全機ではない。かかるものによつて「全機現」は望むべくもない。全き生を表現し、實現するものは表現・實現せられたる全き生である。全きものは稀の場合にのみ現われる故に、この希有の契機に現われたるものこそは現実の人生に存在する全きものである。それは念念に人の心の奥底に作用する。不断の生の変化の實感を客観化するとき、ここに永遠の理念が生ずる。それ故にキリストの言葉のごときが永遠の人生の力である。それは思考の迂路を経て発せられた言葉ではない、全人生の衝動的流露である。

「また汝等わが故によりて、司たち王たちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに証をなさん為なり。彼ら汝らを付さば、如何になにを言わんと思ひ煩うな、言うべき事はその時さずけらるべし。これ言うものは汝等にあらざ、その中にありて言い給う汝等の父の靈なり。」(マタイ伝第十章第一八節(第二〇節))

とキリストは言つた。「…これ言うものは汝等にあらざ、その中にありて言い給う汝等の父の靈なり」と言う言葉は宗教的象徴的表現であつて、それは全人生の衝動的流露の確信をその弟子達に与えんとするものである。全精神をこめて国家のことを念ずる故に忘我の感激より出ずる言葉はさながら高調する全生命の楽音である。そこには、論理的反省によつて整理せられたる意味が分析的思考を強制する支配的力となるために

それにふれる人の全精神に惹起する統一ある影響を妨げるようなことはない。それこそはあらゆる条件を伴って人の精神に全的に作用する力である。その交響の成立するところには如何なる分析も到底及ばぬ偉大な生命が生まれる。国家生命とはかくのごときものである。日本歴史の原初期に長く文字のない時代が続いたということは素朴な幼稚な推論に過ぎない。何らかの記号がなかったとは断言出来ないものである。しかし、千四、五百年前までは、日本には体系的著述は確かになかった。それは我らの祖先がそういうものを重要視しなかつたからである。そうしてその意義は実に重大である。

今日の国民生活の複雑さに対してそれを整理するところの思想の蓄積物は書籍である。しかしながら、書籍はそれが直ちに国民的共感とそれによる宇宙的創造力とを作り出し得るものであると考えることは根本的誤りである。日本の現状はキリストの時代以上に切迫しておる。心ある人がこの根本問題を考えていないとしたならば結果は重大である。大衆に向かつての演説はもし偉大な演説家であつたならば直ちに何千の聴衆の心魂を揺り動かし不滅の印象をその心奥に止めることが出来る。聴者の各自は同時に高い精神的緊張を味わい、そこに溢るる雰圍気は全聴衆に語られざる共鳴の世界を実感せしめる。語られざる故に沁刻せらるる共感を生成することも可能である。その共感が多数の人間を包括し、しかもそれが高められるとき、ここに現出せられる嚴肅感は他の何物によつても作出せられざる威力あるものである。しかし、演説にはなお足らざる所がある。それは心中の複雑なる分析的疑問に応じえぬことである。少数の集會が補足しなければならぬ。そこでは、話者はこれらの疑問を洞察してその心理の奥底をえぐる利刀をなげかけることが出来る。話者は直接各自の分における実行を要請することが出来る。聴者は共に語ることが出来る。それ故、その集まりが国民生活の動乱との關係が実感せられつつ行なわれた場合には殆ど全集會者が劇中の人となることが出るのである。キリストがその使徒を率いて山かげや村はずれ黎明や月明の夜、憩いつつ祈りまた語つた光景が偲ばれる。その周囲の自然との融合によつて集會者は大いなる生命との結合を実感し、大いなる使命を実感する。

「また言い給う『民は民に、国は国に逆らいて起たん』かつ大いなる地震あり、処々に疫病・飢饉あらん。

懼るべき事と天よりの大いなる兆しとあらん。すべて此等のことに先だちて、人々汝等に手をくだし、汝等を責めん、即ち汝等を会堂および獄に付し、わが名のために王たち司たちの前に曳きゆかん。これは汝等に証の機とならん。然れば汝等如何に答えんと予め慮るまじき事を心に定めよ。われ汝等に、凡て逆らう者の言い逆らい、言い消すことをなし得ざる口と知恵とを与うべければなり。汝等は両親・兄弟・親族・朋友にさえ付されん。また彼らは汝等の中の或る者を殺さん。汝等わが名の故に凡ての人に憎まるべし。然れど汝等の頭の髪一筋だに失せじ。汝等は忍耐によりてその靈魂を得べし。(ルカ伝第二十一章第一〇〜一九節)と言った。

キリストは自ら及び使徒等の運命、そこにある祖国の自然、そこにある巍々たる会堂を指しつつ語ったのであろう。

「今や祖国の滅亡は近づきつつある。ここにある会堂を仰ぎ見よ、かつてそこには民族の魂が語った民族的靈魂をゆるがす話声が響いた。人々はそこに集まった感激の炎を胸という胸に点じた。民族の幸福は現実にあった。しかし、やがてそれはなくなるのだ。靈魂を失った人々がそこに集まろうともどうして祖国の会堂であろう。みよ、その月明かりに黒々と聳えたつ会堂の屋根を、も早そこには靈の叫びはない、そこには安らぎもない。何という虚しい姿ではないか。おお、弟子連よ、それが見えるか。卿等はかつてこの会堂に叫んだ偉大なる靈魂の最後の呼吸である。御身等はそれが分かるであろうか、見よ、暁の光に照らされたる丘の光景を、それは幾百年来いかに楽しき祖国の庭であつたらうか、炎熱激しい真夏にもその縁陰には人々が集まって祖国の栄光を、民族の幸福を語り合つた。しかし今日それはない。祖国は今や滅亡せんとしてつがある。

『汝等エルサレムが軍勢に囲まるるを見れば、その亡近づけりと知れ。その時ユダヤに居る者どもは山に遁れよ、都の中に居る者どもは出でよ、田舎に居る者どもは都に入るな、これ録されたる凡ての言の事の遂げらるべき刑罰の日なり。その日には孕りたる者と、乳を哺する者とは禍害なるかな。地に大いなる艱難ありて、御怒りこの民に臨み、彼らは劍の刃に斃れ、または捕われて諸国に曳かれん。而してエルサレムは異邦

人の時満つるまで異邦人に蹂躪らるべし。』(ルカ伝第二十一章第二〇節〜二四節)

御身等はこの時を思え、も早既に魂なき人の日ごとに満つるこの丘に何のよろこびがあろうか。」

かくキリストは語つたであらう。そうしてキリストがかく語る小集会は英雄劇の舞台であつた。劇中の人はその時間的、空間的の広大の背景の中に宇宙的嚴肅を實感した。わが友等よ、かくのごとき集会こそはわれらの魂の結合方法でなければならぬ。祖国救護の途でなければならぬ。それは大演説会の壮大さはないがそれに代わるに深刻さがある。かくのごときものの集成として行なわれる大演説会であつたならば、それは如何に力あるものであらう。友等よ、われらは無数の小集会をその思うままなる時と処とにおいて開こう。而して言え「神国日本の信念を喪いたる国民に神罰の下る時は近づきつつある。かくのごとくにして神風を期待するがごときは許されざることである。すべて神州不滅の信を持てる者は迫害せられ、形式的愛国主義者が横行しつつある、彼等は国を滅ぼすものである。友よ、暁の光に照らされたるこの祖国の山、川、海を。君等の魂はこの山々に結ばれて来た、この海の揺籃にゆられ、この川の囁きを聞いて来た。この魂の郷土を思うならば君等は屍を以て国を護らねばならぬ。大君の都、明治天皇が奠め給い、大正天皇が継ぎ給い、今上陛下が今政をとらせ給うこの都をわれらは去らねばならぬ日が近づきつつあるか。紀元二千六百年の祭典が行なわれた宮城前の広場よ、そこで敵軍が觀兵式を挙行するのを許容するごときことが万一あつてよいであらうか。君等は今、東方の朝日輝く空に大内山のみどりを仰ぎ見て思いつづけよ、祖国存亡の日はここに來たりたるを……」と。

かく同志を結合せよ。かくしてのみ、祖国を防護すべき神秘の力によつてのみ祖国は守らるることを思え、今や宗教的ファンティズム以外に皇國を救うことは出来ぬのである。

(昭和十九年八月一日)

第二篇 同信交流の記録

木野嘉明（編）

序

私がこれまで師と仰いだ方が二人おられる。田所廣泰先生と西脇順三郎先生である。西脇先生は詩人として、また英文学、いや広くヨーロッパ文学の泰斗として既に知られている。しかし田所先生を知る人は世に稀であると思う。今ここに、先生を語る機会を与えられたことはまことに得難い幸いである。

けれども、先生が故くなられて既に久しい。尊顔はつねに眼前に彷彿としているが、往時の日々の映像は容易には戻らない。それに先生ほどの人なら、知徳共に秀れた知己の方も数多くお持ちであったであろうから、私のような者が筆をとることが果して許されるのであろうか。「その名を汚すのみ」という声が地底から聞こえてくるようである。

実は、何度も筆をとり、また筆をおき、夜となく昼となく悩みぬいた。懊悩の日々が長く続いたある日、故き母の遺品の中から先生の手紙が出て来た。戦時中疎開先の会津の母にあてた手紙と一緒に束ねられていたのである。封筒は埃にまみれ、すりされてほとんど形を成していないが中身は無事であった。便箋や原稿用紙に書かれたもののほか、千切ったノートとか藁半紙の裏表に細かな字でびっしり書きこまれたものなど色々であった。私が本当に困憊しきっていた時にこれが現れ出たのは実に不思議な因縁である。

埃を拂い布切れで拭いて一通づつ取り出し、日付順に並べてから静かに読んでみた。すると意外な事実が甦ってきて、深い感慨に耽った。「ああ、そうであったか」と思いを新たにし、また「何と云うことか」と己れの至らなさを嘆いた。数日沈黙考の末「執筆辞退己むなし」とまで思いつめたが、それでは余りに無責任であるから、己れの拙文を弄するよりは、これらの書簡をそのまま掲載させて戴くよりほかはないと思いついたのである。

ただし受信者のその折々の状況を書き添えなければ、書状の真意も十全には伝え得ないと思ひ若干の私事

に触れた。

第一信

昭和十八年十一月二十八日付

世田谷・代田より小石川・大塚桐花寮宛

一昨日はようこそ御来駕下さいました。何の御愛想もなく失礼いたしました。又是非度々御来訪下されるよう祈ります。親鸞は教行信証に「しかるに常没の凡愚流転の群生、無上妙果の成りがたきにはあらず、眞実の信樂まことに得ることかたし。」と言ひ、「それ眞実信樂を案ずるに、信樂に一念あり、一念といふは、これ信樂開發の時剋の極促をあらはし、広大難恩の広心をあらはす云々。」と言つております。この信樂、一念にきわまる信のよろこびの獲得こそ、人生の究極の目的であるというのが、私共の進んで参りました道でありました。それは、人生の最大の悲哀を体験し、動乱の鎌倉時代に生き貫いた親鸞のおおしい精神の表白であり、日本民族の叫喚であつたと思ひます。私共は、学校生活の中にこのような人生の最大問題が究明されることの少しもないことをあやしみ、且つ嘆いて、学校の中に生活しながら、学校以外に道を求めざるを得なかつたのであります。今日と雖も、学校の中にかかるものがあると考えるならば、それは非常な誤りであると信じます。併しながら、かかるものは、多感にして純一な青年学生時代に得ること無くしては、遂に一生を空無にしてしまうことだけは確實であります。それ故私は多くの学生諸君が気の毒でならぬのであります。これは志のあるものがどうしても何とかせねばならぬ問題であります。日本国民のうちの最も優秀な青年、十数万、乃至数十万の人々がその青年時代に得べき、得ざるべからざる最高の精神的経験を逸し去つて行くといふことは、日本民族の靈性の将来に實にとりかえしのつかぬ由々しい大問題であることを人々は思わぬのでしょうか。私共はくりかえし

くりかえしこの一事を説きました。顧みるものは少うございましたが、今多くの学生諸君が我々の同志におります。ということは、いま日本民族精神の覚醒せんとする重要な、再び来らざるごとき契機であるからだと信じます。もし高等師範に大兄を中心として、今日の学校教育にあきたらずして、真に国民の霊性の将来を深くおもう青年が集り、その熱烈な教育が数年後に全日本に開始せられたとしたら、おそらくそれは、日本国民の性格をまでも一変するような大きな結果が招来せらるるでありましょう。私はそれを望んでやみません。魂の深い感動とその不断の変化開展、波うちすすむ生命の振動、それが青年の心から心へとつたえられ脈うって行く日の来ることをおもいますと、私も大兄にお目にかかったことの機縁をよろこばざるを得ぬのです。御自愛を祈ります。勤勞奉仕があるまでには是非一回おいで下さい。

みいくさのただならぬとき皇国に生くるよろこび友とかたらむ

とこしへのみ国にしあれば開けゆく御代はるけくもおもひえがかむ
友と共に語らふことも後の世にいのちつたへんえにしならずや

昭和十八年の末頃は、私は高等師範文科第一部の二学年生であった。代田のご自宅へは足立原さんに連れていってもらったと思う。ほかに足立原さんの友人が何人か一緒であったかも知れない。玄関のすぐ左手に応接間があつて、大きなテーブルの向う側に先生は坐っておられた。浅黒い男らしいお顔に笑がただよっていた。どのような会話が交わされたか全く覚えていない。終始足立原さん等と和やかに談笑されておられたであろうことは想像に難くない。私はほとんど話らしい話はしなかつたのではないか。それとも禪や親鸞には関心があつたから一言か二言口にしたかも知れない。

お手紙は冒頭から教行信証の中の莊重な文章で始つてゐる。「眞実の信樂」とか「信樂開發の時剋の極促」とかは生れて始めて目にした言葉でよく解らなかつた。しかしその韻律に魅力があつた。親鸞にはそれから

一層親しみを覚え、後に教行信証序を暗誦するまでになった。

それよりも先生の文章の魅力にひかれた。力感があって、それがお会いした時の爽やかなお声に微妙に共鳴していた。

私は高師に入学するとすぐに精神科学研究部に入った。部長は桂公平さん（後高教組副委員長・全国高等学校長会々長）で清水芳郎さんが副部長であった。桂さんは地道な性格の人であったが、清水さんは豊島師範でも鳴らした論客で、色白に朱をさした容貌魁偉な人であったが、高師の学生でありながら大学新聞にも屢々寄稿し、哲学の務台理作教授の講演会を聞いたりしていた。シヨーベンハウエルの本を貸してくれたり、「要するにシヨーベンハウエルは、『能うかぎり人を愛せよ』、ということだ。」などと言って私を指導してくれた。ただ他の先輩部員の議論は観念的な言葉が多く、中には自分自身解っていないのではないかと思われる人がかえってよくしゃべった。そんな中で、一緒に入部した桑本彰俊君（プラトン学者田中美知太郎の高弟の加来彰俊法政大学名誉教授）は「こんな時代には、ヘーゲルのような学者は生れないのではないか」と言っていて平然としていた。色々あったが、今にして思えば要するに学校に飽きたらない連中の集まりであったような気がする。

第二信

昭和十八年十二月十五日付

世田谷・代田より栃木縣塩谷郡氏家の農家へ

御葉書ありがたく拝見しました。勤労奉仕はなかなか大変でございましょうと拝察しております。足立原兄からどこか田舎の方に行かれたと承りましたが、農事のお手伝いにおいでになったとは知りませ

んでしたので、はっきり番地をうかがいまして、どのようなことを今頃しておられるのかと色々想像を逞しくしております。くれぐれも御自愛なさいまして精々御努力なされるよう祈ります。

御葉書は本当になつかしうございました。ことに、もし大兄より御返事をいただきますならば、おそろくかようなお言葉であろうと想像しておりました通りの御文面で、一層大兄の御人格が惚ばれまして、うれしうございました。

お訪ね下されました夜、お話し下されました御母様への御愛慕のお気持についてのお言葉は忘れられずにおるのです。そうして、そのお心の中のやさしいしみ入るような愛情と結びついた真摯で謙遜なお気持が、私には、はつきりと感じられまして大兄のことは忘れられぬのであります。おそろく大兄もこの私のことを折にふれ思い出しておられることと存じます。ただ私はあの夜も何か国士気どりのようなことを申上げました。いまこのような謙遜なおたよりをいただきまことに恥入っております。私も大兄のお心持をよくよく惚び上げ自ら努めて参りたいと存じております。

しかし木野兄、人生は相憶うこと以外にないのです。何故か私には大兄のことがおもわれてなりません。お葉書を拝見しておりますとなつかしさに耐えぬのです。百姓家におそらくもう就寝されたであろう大兄の姿勢が浮んで来まして、私はこの手紙を私のこころ通えと書きつけずにはおれぬのです。告白をいたしますと私の心境には変化がおこりつつあります。私は本当に友を憶うということの意味を分りかけようとしつつあるように思われます。大兄のおたよりを拝見しておりまして湧いてくるなつかしさがそうさせるのであります。私は今まで多くの友人に対してすべて私の考えをおしつけて来たように思われますが、そうでなく本当に友を憶うという心持をいま味わいつつあります。

大兄と私とは、一度お目にかかりまして双方が理解しましたように、多くの性格上の相違があります。しかしその相違がある故に今大兄をおもう私の心はどれほど開かれたでしょうか。また何といふなつかしい、言葉に表はせぬ心持でしょうか。私は性格の異なる大兄故に私のすべてのおもいを捧げることが出来るような気がします。大兄のお心持の一つ一つを想像することが出来るようにも思われます。まこ

とに独白めいたことを申し上げましたが、もう少し分析して申しませう。

御葉書に「私如きもの、とても先生のお考えの様な者ではなく、却て不肖を唯々ただ恥入るのみで御座います」とはじめに記されております。お許し下さい。僕は大兄に「私の考えの様なものになれ」などということは、少くとも意識的には些いささかも思つたことはありませんのに、大兄にさような感を催させてしまいました。これは小生の罪であります。敏感な大兄はそれを感得されたのです。このお言葉は私にとつて何よりもよいお薬であります。私は誤つておりました。要求は友情ではありません。私の願うところは同じ日本の国民に対して、ただ忠義の臣とならんことです。しかしそれは要求ではありません。誰人たれひとが自らこれをおもわぬでしょうか。私のこの願いは願望であると共に愉悦であるべきです。もし私がこれを一つの要求として提示するようなことであつたならば、どうして忠良の臣となりえましようか。国家の難局に自ら挺身せんと念ずることが許されましようか。万々御諒察下さい。私は間違つておりました。そう思うところにいよいよわいてまいりますなつかしき思いの、ただ空かけて通えと念ずるのです。誤りもゆるされましよう。憶念のまことさえ通うならば。そうして真に感応道交の歡喜の世界が展かれるならば。私は大兄のお言葉によつてこの自らの誤りから正されねばならぬのです。

——以上、十一日夜記——

これだけを書きましてから多忙のままにもう四日過ぎてしまいました。大兄の御ことを思いつづけております。人生には多くの悲苦があります。要するに概念的認識の殻を破つて生命の本源を知ることが生きる意義であると信じます。友情は真知であります。申上げたいことが沢山あります。それは必ずおたより差上げます。昨日名古屋におりました叔母が亡くなりましたので今夜行で名古屋に吊いに参らねばなりません。疲れておりますのでこれで失礼いたします。くれぐれも御大切に祈り上げます。正月には是非お遊びにおいで下さい。

君のたよりよみつつ君がおもふこともひかくもひなつかしきかな

君がこころこめしたよりのことの端にわがこころひかれけふもよみけり

その頃私は農家に宿泊して暗渠排水の作業に従事していた。土管を埋めるための深い溝を、何十メートルにわたって畑地を掘り下げるきつい仕事であった。昼になると若い主婦がふかし芋と薬罐やかんを下げてくるのであった。夜は思い思いに本を読んで眠った。高等師範の学生というのでどの農家も親切であった。勿論食糧は十分であった。

文科一部というクラスは他の科と違って採用数が少く、どういふわけか特に私たちのクラスは小人数で十五六名に過ぎなかった。それをまた二組か三組に分けて分宿したので随分と寛くわろげて、持って行ったレコードを時々聴いたりしていた。桐花寮で生活していた頃、部屋長の村田さんがもとと上野の音楽学校希望で素晴らしい声の持主で他の部員が留守の時には、ベートーベンの歌曲を歌ってくれたりした。そんなわけで、あの時農家に持って行ったのはシューベルトの歌曲と一枚のシャンソンであったと記憶している。

勤労働員には必ず指導教官が見廻りに来られる。あの時は由良哲次先生（ドイツ哲学者・『ヘーゲルの歴史哲学』の著者）で私達とは別の農家に宿泊された。論理学の講義あじの後に独り残って、教科書のある箇所を質問したのがきっかけで私は先生に愛された。石神井のご自宅を訪問したこともある。伊勢松坂の神宮の家で生れ、講義の最中に、横光利一は中学時代の親友だと明かされたこともある。一夜宿泊先の農家の一室でクラス全員が先生を囲んで会食した。皆が司会をやれというのできこちない司会を努めた。しかしこの動員のと先生との交流は遠のいていった。申しわけないことだが、今そのことを想起すると、この二度目のお手紙に「おそらく大兄もこの私のことを折りにふれ思い出しておられることと存じます」とあるがご推察の通りであったのであろう。（余談であるが、終戦後わざわざ東京から会津へ手紙で由良先生が、大学へ進学をするなら東大の英文科に行く方がよいとわざわざ報せて下さったが、高師からは文理大に進む以外に道はないと思ひこんでいた私はそんな自由な道が開かれているとは露知らず、GHQの検察で配達が遅れ、折角のお奨めも水泡に帰してしまつた）

それはともかく、田所先生の真情あふるるお言葉はどうであらうか。今新あらためて読んでも、まことに何とも言いようがない、胸のしめつけられるような思いである。身に余るといふも気取らずかしく、過信されてお

られたのであろうと切ない思いである。だがその中にも「しかし木野兄、人生は相憶うこと以外にないのです」という厳しい言葉があり、また「私のこの願いは願望であると共に愉悦であるべきです」と意味深い言葉が述べられているのである。

更に追伸には「人生には多くの悲苦があります。要するに概念的認識の殻を破って生命の本源を知ることが生きる意義であると信じます。友情は即ち真知であります」と附言され、愚鈍な私の自覚を呼びさまそうとなさっている。

第三信

昭和十九年二月四日付

世田谷・代田より小石川・大塚桐花寮宛

過日はおいで下さいましたのに何の御愛想もなく失礼いたしました。色々御心おきなくお話下され嬉しく存じております。

古典を読むということは戦陣に於ける突撃の勇気を以てのみ能くしうることであります。何の成心もなく、併しながら確固たる信念を以て古人の諸々の生命がその中にこもりその中に脈うつ古典に對し、その中に生命をそそぎ込む雄々しい決意が古典を読むものにとつての第一の要件であります。これなくして古典を読むということは無意義であるばかりでなく、古典の冒瀆、古人に対する不信ということに外なりません。

私共が生きることに真剣であらうとするならば古典をしつかりと読む外にないと思えます。古人の生命をうけつぎ、そのはかり知れぬ念願を心のうちにもちつづけ、それを成すべく精進する外に人として生きる道はない故であります。個人の生命ではなく、永遠の民族生命は之が継続され開展せられること

を要求するのであります。その相統開展の道は、この古典読誦の外にありません。呉々も御精進を祈り上げます。

迷うこともあります。迷いとは古典の生命に通わなくなったことであります。求めれば求めるほど迷うこともあります。それは求めるに急な心が自らの素直な心をふさぐからに外なりません。しかし迷いは心ひらける為の用意であります。迷えば迷うほど神の恩寵おんちゆうを感じすべきなのであります。

自己とは過去の累積せられた結果的存在であります。その自己を永遠の生命に没せしめようとすると、過去は現在に現在に将来に結合せらるる契機を得、ここに心がひらかれるのであります。過ぎ去りたるもの即ち自己は分析せられたる部分であります。私共にとって、将来（そこにわれわれは常にのぞみをかけるところの）は、この分析せられたるものを永久の生命、総合的統一生命に帰一せしめるところにあるのであります。己れを忘れた行動、叫喚、表現、これらはかくのごときものであります。『ここに人は幼年の記憶のごとき、又遠い未来の夢のごとき、ほのぼのとした想いに、なつかしく慕わしき想いに親をおもい、友をおもい、又人生をおもって心おのずと融とけゆくを味わうのであります。それが永久の思慕であり、娑婆世界に至るほど護念すという断ち難き人生のおもいであります。日本国体というのにかかる想いの政治的表現であります。政治世界にこのおもいが表現せられたことの稀有けうの事実を、世界人類史のうちで日本にみるのであります。』

いろいろと心のままに申し上げました。御精進を祈り上げます。大兄の将来は実に重大な意義をもっております。日本の青年の靈魂に関するものであります。ここでおもい、心に祈ったことが、やがて何万、何千万の次代国民の心の中に結実されることを思いまして、大兄と又諸兄と私との交友が、永遠の日本国民生活の大浪をその中にたたうものであることを祈念いたしましたして次の御便りを待ち上げます。くれぐれも御大切に。諸兄によろしく。匆々

古典研究は先生の許に参じたそもその目的であるから、精魂をこめて読んだ。私利私欲はもとより一片

の私心もなかった。

『古事記』、『万葉集』、『真宗聖典』やバイブルの「マタイ伝」などの講読を奨められた。聖徳太子の『三経義疏』は前から研究対象にしたいと思っていたから、先生の師に当る黒上正一郎さんの著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』を三経義疏研究の頼りとして精読しようとした。しかし佛典の素養がなければ容易に読みされるものではない。またみかた蓑田胸喜著『學術維新』という分厚い本も難解であって、その中の京都大学の田辺元教授との論争を読んでもその正否を判断することは大変なことだと思った。東京大学の学生小田村寅二郎さんと矢部貞治東大法学部教授との論争を収録した小冊子を手にした時は、学生の身で堂々と教授とわたりあっていることに尊敬の念を禁じ得なかったのを覚えている。

ただ今省みると、日本の古典ばかりでなく広く世界の古典を読まなければいけないかと思う。例えばプラトンの『国家論』とかホーマーの『オデュッセイア』や『イーリアス』など、その他種々あるであろう。この点を問うべきであった。当時は身辺匆忙として到底時間が許さなかったであろうが、これは私の怠慢であった。

「ここに人は幼年の記憶のごとき」以下数行は素晴らしい透徹した国体論である。よほど、明晰な思考力がなければ描けるものではない。終戦時、国体護持の四文字が国中を駆けめぐったが、これほどのものがあったであろうか。

第四信

昭和十九年四月一日付

世田谷・代田より会津若松市てんわい天寧寺町宛

拝復、おたよりありがたく拝見いたしました。丁度今日足立原兄が来られ、大兄の御事また諸兄の御

事を語り合いました。新学年にそなえられる諸兄の御決意みな一つおもいであられることを見ましましてまことにうれしく存じました。今日足立原兄と読み合せをしましたとき読みましたアレキシス・カレルの『人間』の一節「人間が復興し、その生理的活動と精神活動とが全き調和を得たら、宇宙それ自体も一変するであろう。なぜならば宇宙は吾々の身体の状態次第でそれ自らの形貌を変えるからである。宇宙とは只吾々に知られていない、多分又永久に知りようのない一つの外側の実在に對して、吾々の神経系統と感覚器官と科学的技術との与える応答に外ならないということを忘れてはならない。吾々は又この事と共に次の諸点をも忘れてはならないのである。即ち吾々の凡ゆる意識状態、吾々の凡ゆる夢想、数学者のそれも、恋人のそれも悉くが一樣に眞実である事と……宇宙の大きさは、吾々の心身の活動が強さを増すにつれて必然的に増大する。」(三九九頁)

今日読合せをいたしましたのは「御製研究」の「自然と人生」、「有限自然より無限人生へ」の各章でありました。そうしてカレルのこの一節やその他を読んだのであります。左はホールデンの『生物学の哲學的基礎』の一節ですが、これも読合せました。

「我々はまた生命に對しては数学的推論を適用することが出来ない。何故ならば数学的の處理操作は空間における各事象の可分割性を假定しているものであって、斯かることは不可分的な一つの全体である所の生命に關しては成り立たぬからである。」(二二頁)

「此の整合は生体周囲の環境にまで広がっているものであり、かくて生体の各部分と環境との空間的關係は分離ではなく、實に一つの統一を構成しているのである。而もここに具現されている整合は決して空間のある特定の位置に限局されたものではなく、却て我々がそれに歸しようとする如何なる空間的位置をも超えて漠然と広がっているものであるから、生体の各部分及び環境の間の空間的關係とは蓋し空間的な存在としては記述することも不可能なものなのである。」(二二―二二頁)

これらの学者が、前者は米國、後者は英國の学者であることを思い出すと、いろいろ時局のことも考えさせられます。ドイツの学者には、これほどの事を言っているものは見当りません。少くとも訳出さ

れているものはないようです。

これはただ御勉強の御参考迄に申し上げます。くれぐれも御自愛御精勵のほど祈り上げます。

この頃私達先生を敬慕する者の互いの交友は深くなり、ほとんど同志的団結と言つてよいものになった。まだ半年にもなっていないのである。田所先生の人間的魅力が強烈であったのである。それでなければこの急激な熱情の高まりは考えられない。

ある日、厚木町の小屋しやうおくに集い、先生と飲食を共にしたことがある。明治天皇の御製の朗読もあったような気がする。それから相模の河原に遊んだ。すべて足立原さんの計はからいである。皆東京在住とは言え、動員先は別であるから全員を一堂に集めるのは大変な世話で、足立原さんでなければ出来ないことであつた。

カレルとホールデンの著書、それは貴重な研究の緒口いとぐちである。離れ離れはなになつても労を嫌いとわず筆をとつて下さる。その優しさが胸にしみる。

『人間この未知なるもの』の著者アレキスカレルはアメリカ人で『生物学の哲学的基礎』の著者ホールデンはイギリス人である。面白いのは「ドイツの学者にはこのようなことを言っている者は見当りません。」と平然と書かれていることである。当時ドイツは同盟国であつたのである。

太平洋上の戦局が悪化してくるにつれ、古典研究より政局批判へ傾いて行つたのは致し方のないところである。話題は変つた。政治家の墮落や軍部の横暴が目に残るようになった。奥村情報局次長の報道の欺瞞とか武藤軍務局長の思想の誤謬とか御前会議における東條大将の不遜な態度とか、驚くべき話題が次々と出た。制空権が奪われ、外交戦略が一步誤れば、ついには伊勢神宮の聖域が米兵の軍靴によって踏みじられるかも知れない。危機感の日を経るごとに深まり、東條内閣の失政に対する批判が処々方々で囁やかれるようになった。東條大将は言論弾圧に乗り出し、ついに陸軍大臣を兼務しながら参謀総長を兼ねるにいたつた。これは明らかに憲法違反である。甚はなだしい越権行為と憤り、先生は内閣打倒の学生運動に乗り出した。私達は先生の文書を廻し読みしながら同志の拡大を計つた。

第四信から第五信の間に六ヵ月以上の月日が流れている。交信が途絶えたわけではない。私宛の手紙が紛失しているのである。失われた手紙の封書の裏には「鹿島守男」とか「香取建夫」とかいう名が記されていた。先生の変名である。戦後佐原の町を訪れ香取神宮を参拝して驚いた。あまりに見事に修復されていたのである。発起人筆頭に岸信介の名があった。岸首相が安保改定に命をかけたのは自ら護国の鬼とならんとしたのであろう。共に命をかけた賀屋興宜代議士の世田谷の私邸を偶然訪れたことがある。土地の旧家の先輩に誘われたのである。いかにも古い建物で庭の草も荒れていた。二階に案内され、ふと見ると部屋の一隅に黒ずんだ鎧よろいがあった。それが古武士を思わせるどっしりとしたその家の主あるしの風貌とよく調和していた。

これは余談である。余談ついでもう一つ。津軽に旅して思いきって足をのばし龍飛岬の頂上に立った時のことである。茫洋とした北海の海波を眺めてからその辺りをぶらついた。ところが思いもよらぬものをそこに見出した。吉田松陰の足跡を記した碑である。その時思ったのである。田所先生の憂国の情は松陰のそれと少しもかわらないと。それはすさまじい気概であった。

第五信

昭和十九年十一月二十九日付

会津若松市片柳町から埼玉縣川口市栄町宛

拝復おたよりありがたく拝誦いたしました。いつもかわらぬ御友情心より感佩かんはい致しております。こちらに参りましてより風邪も用事のため掛かかしく治らず、ようやくこの一兩日来こちが晴々として参りました。数日後には上京の予定であります。

本日のお手紙、一貫せる御志まことにうれしく拝誦いたしました。しかしながら古來悪法も法なりと言われておる言葉がありますように、その法に順したがう従順の心が、国家を支える力であることを私はこと

に自分のところに悟るところがあつたのであります。悪法はもとより改めねばなりません。秕政は急ぎ除くべきであります。しかしそれには方法が、即ち法律を犯すことなくして成就すべき道があることを私共はよくよく考えねばならぬとおもうのであります。国家の混乱を起すことなくして成功すべきよう熟慮するところに破綻なき改革が遂げられることを思うべきであります。かくのごときことが成し遂げられるためには、国民上下が自分の私欲を去ることは勿論、自分の我見を去るべく反省せねばならぬのであります。我見とは自我を主張するだけに限りません。要するに現実を離れた理想主義です。これが自己を神化しようとするのであります。朝に在るものは権力を持っており、ともすればそれを濫用し、野に在る正論を抑圧しようとしています。しかしながら、それだからと言って、野に在るものが力を以て権力濫用者を除こうとするのは正論の根拠を直ちに覆えすものとなります。私に走って権力を濫用するものが強いが、自ら省みつつ正論を持つるものが強いが、疑いもなく強者は後に在ります。力は権力、暴力に限りません。理論的能力もその一部でしょう。西郷南洲が何故偉大であつたか、それは盤根錯節にあつて初志を貫徹したことに在りますこと言うまでもありませんが、貫徹すべき道を学んだことが彼を偉大ならしめたものであります。

我々は如何に国家のためと思うとも、自ら誤ることが屢々あります。誤断もありましょう。自ら自分の心情を欺くことも凡夫人たる人間には無きにしてもあらざであることを忘れてはなりません。自ら信じて行つた道がなお誤多きものであつたことを発見しうる人でなくては偉人ではないのであります。私はそのようなことから私自身のつたない体験を告白いたしました。そうして少なくともそれだけの体験告白は出来る人間であつて、従つて大兄等の友たることが出来ようということをお申したのであります。併しながら、かようなことは飽くまで人生そのものから（即ち如何なる人からでもなく）教えられねばならぬということ（私はそういうことを今日まで繰り返して申上げて来ましたが）思いますと、私が今申したことも飽くまで私の告白として聴いていただきたいと念願するのであります。多く、かようなことを申しますと、志のない人は先輩の教訓ときき、徒に自ら逡巡狐疑するようになります。大兄等は

かくのごときことを人生そのものから学ばれるよう、私は従来も祈って来ましたが、今後も祈ります。大忠の人とならねばなりません。それは自らの責任において立つ人が、真の協力によって進むときはじめて実現せられます。私は小生の小さな意見や経験によって諸兄の大成を妨げたくありません。何より大兄等の大成を祈っております。ただ我々は常に国を思う志を通わせて生きねばならぬのであります。これに老幼春秋の区別はありません。師からではなく人生そのものから学ぶ人が真人であります。禪の書で些か俗になります、証道歌というのに「君見ずや絶学無為の閑道人、妄想を除かず真を求めず、云々」とあります。人智は限りありそれ故にわれわれには生くべき天真の道、真の忠道が与えられておるのであります。くれぐれも御精進を祈ります。先は右御返事まで。勿々

事はいつしか洩れて私たちは次々と憲兵隊に連行された。東條大将の言論弾圧はいよいよ酷しく、憲兵達の血相は変っていた。先生は長く留置されたが私は何故かたった一晩で釈放された。釈放されると今度は大学当局に召喚され説諭を受けた。担任の大杉謹一先生の説諭は大塚駅に近い御自宅で拝聴した。「大学の法律学の教授があれは憲法違反にならないと言っていたぞ。」と訓戒されたが、心優しい先生の顔には困惑と苦渋の色がにじんでいた。

結局自宅謹慎ということで私は福島縣会津若松へ帰った。まだ空爆以前東京上空に敵機が侵入してきた時、私は為政者に激しい憤りを感じ、即時に家業をたたみ鈴木金属株式会社と家屋の賃貸契約を結んで家族を疎開させていたのである。まだ疎開騒ぎがあまりやかましくもない頃であった。ところがその会津若松に先生が来られたのである。憲兵隊の留置場で体調をくずして奥様の御自宅のある市内片柳町で静養するためであった。何か糸で操られているような不思議な因縁である。

謹慎中の身ながら片柳町を訪れると、思いのほかお元気で、奥様が仕舞をなさっていること、芸事は何でも小さな時分から始めるとよいなどと色々語られ、久しぶりに楽しい夕であった。帰りに井上先生へ紹介状を書いて下さった。井上先生とは憲法学の権威井上孚磨陸大教授である。早速東京へ旅立ったが、この時は

自宅謹慎のことはすっかり忘れていたらしい。井上先生は倒閣運動のことを焦燥感にかられた軽拳とみなされてきた。色々なお話の中で忘れられないのは勝海舟についての話であった。明治新政府の役人たちを「あの子供が、小供が」と言っていて笑っていたと云う。後海舟の偉大さを知ることが出来たのは全く先生のお蔭である。

復学を許され再び軍需工場で働くようになる。最期に動員されて行ったのは日本鋼板株式会社という海軍の爆弾を作る工場で仕事は長く続いた。第五信はその頃のものである。

憲兵隊事件で猛反省され、義に立たんとするものはつねに人生そのものから何かを学びとろうとする心構えを持っていなければならぬと、意をつくして語られている。私は読めば読むほど胸が苦しくなった。「倒閣」という言葉に妙に心を高ぶらせ、すっかり幕末の志士気取りになっていた私の慎重さを欠いた行動のためには起った今度の事件である。そのため大事なお体を害されたのである。それを少しもがめず切々と道を説かれている。

今静かに再読すれば、破綻なき改革を果すには私心を去ることはもとより我見を去らなければいけない、我見とは自我を主張することに限らず、現実を離れた理想主義を指すところに明らかに述べられているのである。そして更に力は権力、暴力だけでなく理論的能力もその一部であることを明かされ、続いて西郷南洲の偉大さがいずこに在るか重大な考察に入っている。

第六信

戦後昭和二十一年三月二十五日付

岩手縣気仙郡盛町より会津若松市天寧寺町宛

「二月下旬より少し不調を示し、先頃まで熱がつかまりました。今月下旬諸兄御来盛の御企てはそれで取り

やめていただきました。」と右端に書き足しがある。

拝啓大学の試験を受けられるので御多忙なのではないかと推察しております。その中を甚だ申し兼ねますが御姉上様にでも御願申上げ度々、こちらでは前B剤（服用）が手に入りしましたが、今日はどうしても手に入りません。粉末でも錠剤でもよろしゅうございますが、例えばビスラーゼとかキュウラというようなもの（八・九円のもの）大塚二本（小生と妻と各一本）月々入要なのであります。それ位何とか御入手いただけませんか。もし出来ませうでしたらいつでもよろしゅうございますから森の家の方に、お知り合いの方でもあちらよりお通いの方にお託し下されお渡し下さいませんか。一応二十円同封いたしておきます。お暇になりましたら代価等くわしくお知らせ下さい。（先達の氷枕等についても）

それからこれはお暇になりましたら願上げます。ワラ半紙、ロール紙何れでもよくお譲りいただけるのがありましたら分けて下さい。製紙会社も手紙では意が通じませず、又小生手持ちもあるのですが疎開荷の中に入れて出て来ません。

「憲法改正論に対する意見」くわしく拝見いたしました。「自ら先ず余事を振りはらい、烈志に生きて国民の誠を振起せむより他に術なし」という御言葉に盡きましよう。ゲーテはデーモンを信じ、自らそれに導かれておると思い、又すべて偉大な人はその力のままに生きるものであることを信じ、ナポレオンの中にもデーモンが生きておると思っていたと言います。人の生活は蓋棺の後定まると言われ、我々は死後のことをとかく思いはかることは出来ません。生きむとする意志のままにそこに身をまかせて、かえりみもせず生き貫くということが畢竟この世の究極の意義でありましよう。

人生の無常を知るといふのも、無反省といふのも、我が事に於て悔いることなしといふのも、生也全機現死也全機現といふのも、地獄は一定すみかぞかしといふのも皆同じでしょう。それを知るか否かに人生の価値は定まりましよう。それがわからぬ人にはいくら説明をしても無駄でしょう。原理は信知す

べき対象であるのみで演繹中樞としての絶対観念ではありません。日本国民は国体原理の中に情眼を貪っておつた為に惨敗したのだと言えましょう。原理の重荷の下に倒れたといえれば嚴肅のごとくですが実は人生の喜劇であります。道元は不染汚ぜんなと言っています。今日亡国の悲しみにも染汚せられず、デモクラシーの横議にも染汚せられず、神代ながらの人生そのものを発見するか否かが日本復興の能否の分かれるところと信じます。日本国体といえは実はこの人生そのものの根本形態であるのですから、我々は国体論以上に大切な「烈志」レウシ。人生をおもわねばなりません。そういうことを思いつつ御論文を拝誦しました。先は御願旁々右まで。御母上様はじめ皆様によりしく。匆々

東京大空襲は浅草仲見世通りの工員寮で被災し、次の空襲を赤羽被服廠の崖下がけしたで経験、そして間もなく習志野予備士官学校に入隊し、一カ月後には前橋予備士官学校の重機閲銃隊に配属され、文字通り月月火水木金の猛訓練のため、私はげっそり痩せて終戦を迎えた。その頃先生は御母上様と奥様と御三人で岩手縣気仙沼郡盛町へ疎開されていた。

盛町は遠い。東北線の一の閑駅で大船渡線に乗り換え、トンネルの多い山間部をうねうねと縫うように走り、ようやく辿りつく終着駅が盛である。病身で荷造りやら何やら多忙を極めた上、延々たる旅路ではどんなに辛い思いをなされたことであろう。

会津の家族の許で、疲れた体を癒すと私は直ちに盛に趣いた。大船渡線は貨物列車の無蓋車むがいしやであった。先生は二階建の家の階上の一間ひとまを借り受け不自由な三人暮らしをなさっておられた。しかし以外にお元気でいつもの明るい爽やかな声で「神田で資治通鑑を買って送ってくれよう吉田君に頼んでいるんですよ。今一番それを必要としているのは私ですから」などとおっしゃって「折角来られたのですから近く海岸線を散策なさったら」と逆に気をつかって下さった。次に訪れた時であったか「中外商業新報の社説はしっかりしていますね。外務省出身の某氏の記事もなかなかいいです」と言われた。家に戻って早速講読を申しこんだ。タブロイド版であった。既にアメリカの労働組合法の解説も載っていた。中外商業新報（後の日本経済新聞）

の小浜利得社長は東洋經濟の石橋湛山社長とともに民間經濟評論家として名を馳せていた。後日、日本工業俱樂部で開催された小浜利得講演会を聴きに行つた時は立錐の余地もない超満員であつた。

ピアノ線で有名になつた鈴木金属株式会社との契約がされた赤羽の家は戦災を免れていた、そこへ学友が一人また一人とやってきて、数人の共同生活が始まつた。大學進學のため東洋史とか人文地理とか文學や哲學など進路は様々であつたが將來は互いの信を深めていこうといきこんでいた。私は会津と東京を行つたり來たりしていたので親友の吉田君が連絡係の役を努めて下さつた。吉田君は田所先生が特に厚い信頼を寄せていた人で、純粹無垢な而も激しい情熱を内にひめ、誰からも敬愛されていた。吉田君さえ生きていてくれたら、あの麗筆で先生讚歌の文を書いてくれたであらう。戦後幾許かの年を経ずして郷里沼田で自ら命を断つてしまつた。何ということであらうか。

より集つたこれらの友と、そのほか各地に散らばつた同志の者たちは、みな先生の身を案じながら懸命に励んでいた。最終の手紙はそんな中で届いたのである。

薬のことは姉が国立若松病院の薬局に努めていたからで、B剤が二本というのは身重の奥様の健康を案じられてのことである。

ゲーテのデーモンに發して文面には裂帛の気合がある。「人生の無常を知るといふのも」以下「地獄は一定すみかぞなし」まで真知の言葉を書きつらねておられる。そして「それがわからぬ人には、いくら説明をしても無駄でしょう」と断じておられる。これは徒らに氣を高ぶらせている私の淺薄な行動に対するきつい戒めであつたのだ。「烈士」という言葉も、先生の胸奥からほとばしるものと、私の口先から出るものとは厚みも重みもまるで違ふ。もはや汚染された身の語るべき言葉はない。

— 田所廣泰先輩 遺文追録 —

平成十四年三月十五日発行

(非売品)

編 者 櫻 国民文化研究会

編集委員代表 上 村 和 男

発 行 所 櫻 国民文化研究会

〒二五〇一〇〇一

東京都渋谷区東一十三丁目一四〇二

TEL (〇三) 五四六八一六二三〇

FAX (〇三) 五四六八一四七〇

落丁・乱丁のものはお取り替えます。

